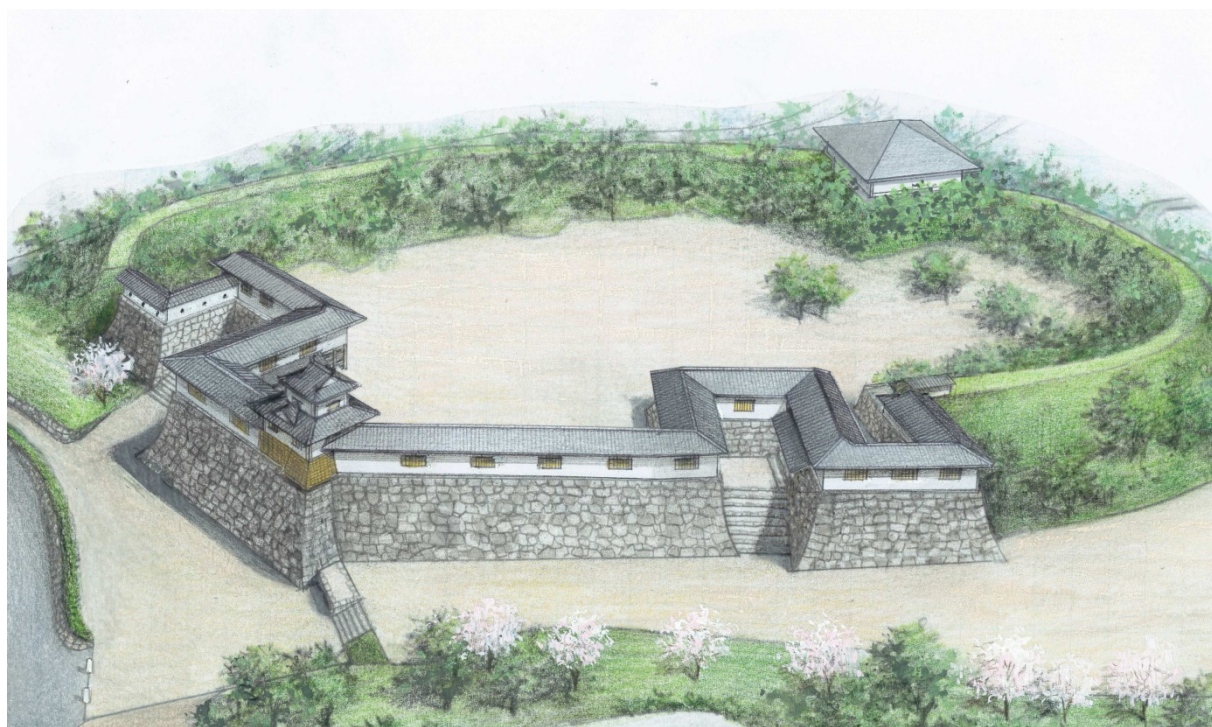


刈谷城シンポジウム

～城郭復元と歴史まちづくり～

記録集



開催概要

地域の歴史を次世代に継承し、まちへの愛着や誇りを深める歴史まちづくりの取り組みが全国で行われています。本シンポジウムでは、刈谷城復元を中心に、今後の刈谷の歴史まちづくりについて、様々な意見交換を行いました。

- 日時
平成 29 年 1 月 21 日（土）午後 1 時 30 分開場 午後 2 時開演 午後 4 時 30 分終演
- 場所
刈谷市総合文化センター 小ホール（刈谷市若松町 2-104 TEL 0566-21-7430）
- 来場者数
281 名

プログラム

1. 開会あいさつ
2. <第 1 部>基調講演
『城郭復元の考え方と刈谷城復元』
講師：麓 和善
3. <第 2 部>パネルディスカッション
コーディネーター：矢野 和之
パネリスト：麓 和善
高瀬 要一
舟久保 藍
竹中 良則

テーマ①「刈谷城復元の価値」

テーマ②「刈谷城復元事業に対するご意見について」

テーマ③「歴史まちづくりの重要性」

4. 意見交換会

出演者紹介



麓 和善 氏（基調講演・パネリスト）

1956 年香川県生まれ。工学博士。財団法人文化財建造物保存技術協会を経て、現在名古屋工業大学大学院教授。専門は、日本建築史・文化財保存修復。

亀城公園歴史的建造物等整備検討委員会委員長の他、岐阜県及び山梨県の文化財保護審議会委員、安土城・鳥取城・金沢城・犬山城・彦根城・甲府城・小牧山上・岐阜城・名古屋城等、全国の史跡整備・文化財建造物修復に携わる。

主な著書・論文として、『城の日本史』（講談社学術文庫、共著）・『日本の城・再発見 彦根城、松本城、犬山城を世界遺産に』（株式会社ブックエンド、共著）「名古屋城大天守宝暦大修理に関する史料と修理計画について」（日本建築学会計画系論文集第 638 号）ほか多数。



矢野 和之 氏（パネルディスカッションコーディネーター）

1946 年熊本県生まれ。修復建築家。1969 年武蔵工業大学（現東京都市大学）工学部建築学科卒業。同大学修士課程、博士課程を経て、（株）文化財保存計画協会を設立。代表取締役役に就任し現在に至る。日本イコモス国内委員会事務局長。

刈谷城復元基本設計の他、熊本城二階御広間、津山城備中櫓、出島和蘭商館、函館奉行所など歴史的建造物の復元にあたる。著書に「空間流離」、「甦る古墳文化」など。



高瀬 要一 氏（パネリスト）

1947 年神奈川県生まれ。専門は遺跡保存整備。

亀城公園歴史的建造物等整備検討委員会副委員長。奈良文化財研究所文化遺産部長を経て、公益財団法人琴ノ浦温山荘園理事長に就任し現在に至る。

平城宮跡の他、大坂城跡、名古屋城跡、犬山城跡、姫路城跡など全国の遺跡保存整備に携わる。主な著書に「文化財論叢」（奈良文化財研究所、共著）「古代庭園研究」（奈良文化財研究所、共著）など



舟久保 藍 氏（パネリスト）

1972 年奈良県生まれ。歴史研究家。

第 2 回奈良日賞受賞（奈良日日新聞社・平成 25 年）。

「シリーズ藩物語・刈谷藩」（現代書館）の他、天誅組の研究も行うなど、刈谷の歴史研究に携わる。その他の著書として、「実録 天誅組の変」（淡交社）、「真田丸を歩く」（現代書館、共著）など。



竹中 良則 （パネリスト）

1944 年刈谷市生まれ。刈谷市長。

1967 年関西大学商学部商学科卒業後、刈谷市役所に入所。生涯学習部長、企画部長、参事、市収入役を経て、2007 年より現職。

開会あいさつ

— 司会 —

皆さま、こんにちは。本日はようこそお越しくださいました。満席ということになりまして、本当にありがとうございます。

司会進行を務めさせていただきます、私、刈谷市出身、そして現在も刈谷に住んでおります、フリーアナウンサーのふじたあきこと申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

開演に先立ちまして、刈谷市長、竹中良則より皆さまにごあいさつを申し上げます。では、竹中市長、どうぞ壇上にお上がりください。お願いいたします。

— 市長 —

皆さま、こんにちは。そして明けましておめでとうございます。まだ1月でございますので、そういうあいさつから始めさせていただきます。今年は、暮れから正月にかけて、大変穏やかないい天気が続いておりました。皆さま方は輝かしい中に厳かなお正月をお迎えいただいたことと、心から喜んでおるところでございます。

そんな中ですので、今日は特に、江戸時代からのお話になると思いますので、今朝の新聞にありました岡崎にあります伊賀八幡宮で、昨日大寒の日に、毎年行われております的当て神事のお話からさせていただきたいと思います。私も新聞を持ってきたのですが、弓で矢を放ち、的の割れ方で1年の吉凶を占うという行事が江戸時代から連綿と続いているところでございまして。昨日、大寒の日に、毎年行われているということで、実施されました。矢を2本放って、1尺2寸、約36センチの板に矢が当たる。



その矢の当たり方で、今年の作物だとか、産業だとかの吉凶を占うということで、毎年行われているものでございます。昨日の結果ですと、今年は米と工業が上、天候が中、そして商業が下というような結果になったそうでございますが、江戸年間では、徳川家の戦勝祈願の菩提寺である伊賀八幡宮で、こうした的当て神事を行った結果を早馬で必ず、江戸城まで届け出たということを聞いております。江戸時代初期から続く大変歴史的な行事が昨日行われたということで、まずもって、このお話からさせていただきます。

そんな中でございますが、本日は刈谷市を説明するのに、トヨタ系企業を中心とした自動車産業と共に発展してきた、企業城下町である刈谷市であります。古くは刈谷城の城下町として栄えてきたという長い歴史があり、その長い歴史があるからこそ、自動車産業を呼び込むことができ、現在の発展につながってきたのではないかなとも思っております。そのようなお話をさせていただきたいということで、シンポジウムを開催させていただいたところでございます。

皆さまも既にご承知のことかと思いますが、天文2年1533年に、水野忠政公が刈谷城を築城して以来、初代藩主である本家の水野家をはじめ、分家の水野家、稲垣家、阿部家、本多家、三浦家、土井家というようなことで、刈谷は9家22人のお殿様によって、譜代大名がこの地を治めて、現在に至るまで、時代の先駆者となる多くの偉人を輩出してきた土地柄でございます。

今日は市外からお越しになった方もお見えになるかもしれませんが、刈谷城は平成27年4月9日の読売新聞でも、奈良大学の千田学長や磯田前静岡文化芸術大学教授などによりまして、刈谷城が織田信長だとか、あるいは豊臣秀吉、徳川家康の三英傑に関係する魅力的なお城として、東海百城にも選定をされているところでございます。

平成24年と25年に、市内の中学生を対象に次世代のタウンミーティングを開かせていただきまして、最初に「刈谷にお城があったことを

知っていますか」とか、あるいは「城下町だった歴史を知っていますか」ということを生徒さんたちにお聞きをしております。全6中学校でお聞きをしておりますが、この刈谷城の学区内であります刈谷南中学校では、さすがに半分くらいの生徒さんが「知っている」ということで手を挙げてくれたのですが、それ以外の学校では1割にも満たない人数しか手を挙げてくれないというようなこともございまして。亀城公園にお城があったことや、城下町の歴史を知らない中学生が大変多くいることが分かりまして、大変驚かされたような次第でございます。こうしてサークルを組んでいろんなお話をさせていただいて、残りの生徒さんはこちらのほうで聞いていただきました。それで後ほど、ご意見を伺ったりしたわけです。これが私でございますけれども、皆さんと一緒にお話をさせていただいています。

平成26年に実施させていただきました、児童生徒の意識や行動に関するアンケートでは、刈谷市の歴史に興味があると回答した生徒は13パーセント、どちらかといえばあると回答された生徒を含めましても、40.6パーセントであり、これは、私は非常に少ない数字だなと思っています。先人の創意工夫とたゆみない努力により、発展してきた本市でありますけれども、今、刈谷に住む子どもたちの多くが、亀城公園にお城があったことさえも知らないということにも驚いておりますし、町の歴史、文化の継承が廃れ始めているのではないかなということに、大変危惧を抱いているところでございます。

私はいろんな所で、常々、「歴史を学ばなければ現在は語れない、現在を学ばなければ未来は語れない」とお話をさせていただいてまして。刈谷の未来をどうつくっていったらいいのかということは、当然それは過去を顧みること、つまり、歴史を知ってそこから考えることから始まるのではないかなと思っておりますし、子どもたちにもぜひ、歴史に興味を持っていただきたいなという思いを抱いているところでございます。

そこで、現在本市では、亀城公園の再整備に取り組まさせていただいているところでございま

して、本日は他市からお越しいただいたお客さまもいらっしゃると思いますので、ここで亀城公園について簡単に説明させていただきたいと思います。

亀城公園というのは、刈谷市総合文化センターから西に2.5キロほど行ったところに、本市の西の端でございます境川という川が流れておりますけれども、これが昔の尾張と三河を分ける川で、国の境でございまして、刈谷城址という立地を生かして戦前の昭和12年に開設された本市で最も古い都市公園でございまして、今年の4月で80年を迎えます。東京でいいますと日比谷公園、名古屋でいいますと鶴舞公園というような本市にとっても特別な意味のあるシンボリックな公園でありまして、本市の歴史を語る上で重要な、本市の顔というべき公園であると思っております。桜の名所としても知られておりまして、毎年、春には桜まつりが開催され、市内外から多くの皆さまにお越しいただいております。

しかし、開設から80年が経過したことで、桜の寿命と共に、生育状況の悪化、あるいは施設の老朽化が進む状況にあります。現在、本市の歴史や文化が感じられる公園として、再整備を進める中で、刈谷城の復元、あるいは、いよいよ事業着手となる歴史博物館の建設に取り組んでいるところでございます。刈谷城の復元は、第7次総合計画策定時に、市民を中心に組織されたかりや未来会議からの提案ですとか、あるいは市民団体などからの6000人の署名を元に要望書が提出をされておりました。これらを受け、事業を進めてまいりました。先ほども申しあげました、中学生とのタウンミーティングで



亀城公園の桜まつり

は、「刈谷市は、産業は盛んだけど観光資源がうまく活用できていない」あるいは「他市に誇れる自慢できる町、もっと有名な町にしたい」といったご意見もいただいております。まして、本市の長い歴史資源を生かした、にぎわいのある町にしていく必要があるとも思っているところでございます。

刈谷城の復元計画の策定に当たりましては、平成21年から26年にかけて、計5回、約2860平方メートルの範囲で発掘調査も行わせていただいております。元々、建造物や石垣は明治期に取り壊し、払い下げられまして残っておりませんが、表門や裏門の礎石跡や石垣の下の地盤を強固にするための地固めの遺構と呼ばれるものが、江戸時代初期から中期にかけて描かれた、信ぴょう性の高い城絵図のとおり発見されたところであります。

これを受けまして、昨年度、整備検討委員会を一般公開にて開催させていただきました。本日もこの後、ご講演やパネルディスカッションにご参加いただきますけれども、国指定の史跡整備に大変お詳しい先生方からご意見をいただきながら、刈谷城の建造物等の規模や意匠などにつきまして、総合的かつ専門的な検討を重ね、基本設計を行ってまいったところでございまして、本日のシンポジウムのプログラムの表紙にもあります、イメージパースは昨年度の検討を反映して制作されたものであります。

亀城公園につきましては、史跡認定といったものはありませんけれども、これまで行ってきた取り組みは、国指定の史跡に劣らない検討を行ってきたと自負しておりまして、その結果と

して刈谷城の辰巳櫓だとか石垣などの配置や規模などが復元できる段階まで判明してきたものと考えています。

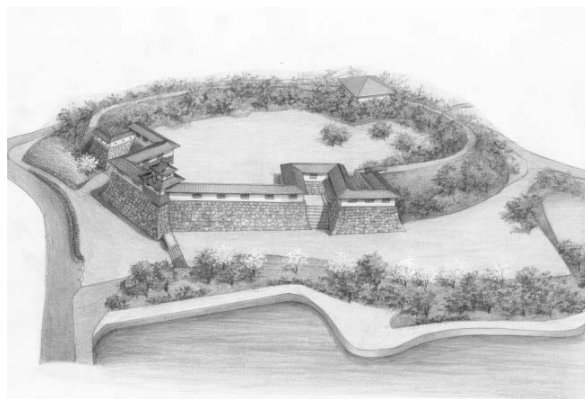
しかしながら、復元に向けてはその工法も含め、まだまだ課題もございます。皆さまもニュース等でご覧になったと思いますが、昨年4月に発生しました熊本地震におきまして、熊本城が甚大な被害を受けたところでございます。報道によりますと、現在は現場で崩れた石垣の整理や、被害の拡大を防ぐ工事が行われているところであると聞いております。熊本城は、国指定の特別史跡の災害復旧でありまして、被害の確認状況や原因の究明、復旧の方法など、まだまだこれから検討されるところが多いと思います。来年度、熊本市によりまして復旧基本計画が策定される予定がございます。特に安全対策という点についても、新たな技術の導入を含め、文化庁などと十分に検討されるものと考えております。

そこで、刈谷城復元につきましても、石垣の構造や隅櫓等の建築を予定しておりますので、熊本城での検討結果を踏まえる必要があることから、熊本城の復旧基本計画が示されるまでの間、刈谷城の復元に関する実施設計の発注を見合わせたいということで、12月の本会議の冒頭でも私のほうからご報告をさせていただいたところでございます。

このような状況ではございますけれども、平成25年度には刈谷城を築城してから480年という節目の年を記念しまして、徳川家康公のご子孫である、徳川宗家18代ご当主、徳川恒孝公、あるいは家康のいとこに当たり、刈谷藩初代藩



亀城公園歴史的建造物等整備検討委員会



刈谷城復元イメージパース



刈谷城築城 480 年記念会（平成 25 年 8 月 10 日）

主である水野勝成公のご子孫である、水野宗家 20 代ご当主、水野勝之公にお越しをいただき、ご講演をいただいた後、全国各地の水野家、刈谷藩最後の藩主であった土井家の方々などとのシンポジウムを開催させていただいたところでございます。

また、かねてからのご縁により、昨年の 7 月 30 日には、本日もお越しを賜りました、舟久保先生の著作『シリーズ藩物語刈谷藩』の出版を記念いたしまして、刈谷藩主シンポジウムも開催されたところでございます。本日のシンポジウムにつきましても、刈谷の歴史への理解を深めていただく絶好の機会になるとともに、大変楽しみにさせていただいているところでございます。



刈谷藩初代藩主 水野勝成
(賢忠寺所蔵：広島県指定文化財 抜粋)

刈谷城の復元によって、未来を担う輝かしい子どもたちや後世に本市の素晴らしい歴史や文化を継承いたしまして、刈谷の魅力や個性を高め、刈谷への愛着や誇りを培うことを期待しております。そしてこのことが、歴史、産業、文化を生かした地方創生や、定住人口や交流人口を増やす定住促進につながり、刈谷市の魅力の向上、中心市街地の活性化、持続可能なまちづくり、歴史を生かしたまちづくりなどに、大変重要な役割を果たしてくれるものと思っています。

今日の刈谷市の発展の礎である、先人の知恵と努力を振り返り、感謝し、今を生きる私たちがこれから成すべきことをしっかりと考える必要があると思っております、このシンポジウムを通じまして、少しでも多くの市民の方々と時間と考え方を共有し、刈谷市の未来のまちづくりにつながる刈谷城の復元について、今一度お考えいただくことができれば、大変にありがたいことだと思っております。

最後に、本日ご来場いただきました皆さま、そして基調講演を行っていただく名古屋工業大学大学院教授の麓和善先生をはじめ、パネリストとしてご出席いただきます皆さまに、心からの感謝を申し上げまして、私からのあいさつに代えさせていただきたいと思ひます。本日はご来場いただきまして、大変ありがとうございます。



正保城絵図 参州刈谷城図
(国立公文書館所蔵 抜粋)

第1部 基調講演

— 司会 —

竹中市長、ありがとうございます。それでは、刈谷城シンポジウム、これから進めてまいりたいと思います。

第1部、基調講演。本日は、名古屋工業大学大学院教授の麓和善様にご講演いただきしたいと思います。麓様は、現在名古屋工業大学大学院教授として、名古屋城や犬山城、金沢城、鳥取城など、数多くの史跡の整備、それから文化財建造物修復に携わっており、刈谷城復元に関する亀城公園歴史的建造物等整備検討委員会の委員長を務めていただいております。詳しいことは、本入り口でお配りいたしましたこちらのプログラムに詳しく紹介されておりますので、どうぞこちらをご覧ください。

本日は、『城郭復元の考え方と刈谷城の復元』と題しまして、お話をいただきしたいと思います。それでは、麓様、どうぞ壇上をお願いいたします。

— 麓 —

それでは、ご紹介いただきました『城郭復元の考え方と刈谷城復元』ということで、お話をさせていただきますが、刈谷城というよりも、地元の方には亀城公園といったほうが多分、親しみやすいのだらうと思います。その亀城公園ですが、あれを文化財だと言うと、皆さんどうでしょうか。

亀城公園の入り口といいますか、堀の脇の所に、豊田佐吉の銅像があります。あの豊田佐吉の銅像は市指定文化財に指定されているんですね。で、亀城公園、刈谷城跡はまだ指定はされ

ていません。指定されていないところは文化財じゃないかという、決してそうではないですね。文化財というのはそもそも、大きな文化財という概念があって、その中で既に指定されているものがあると思ってください。特に国が指定すると国指定の文化財、県指定の文化財、そして市町村指定の文化財というようなものがある。でもまだ、指定されていない文化財というものがあるわけです。そういう意味では、刈谷城は、指定はされていないですけども、文化財です。

文化財には、いろいろな文化財があります。大きく分けると形がある文化財の有形文化財。形のない文化財の無形文化財。有形文化財は、建造物であるとか、絵画彫刻等の美術工芸品というようなものであるとかですよ。無形文化財というと、伝統芸能であるとか、あるいはお祭りなんかも無形文化財に入ります。そういう文化財と、もう一つ史跡名勝天然記念物という文化財のジャンルがあります。

刈谷城ですが、先ほどこれは文化財だと言いましたが、今、申しましたジャンルでいいますと、史跡に当たります。かつての城跡ということで、城跡は史跡に分けられています。これは、指定されている、されていないは別にして、やはり文化財ですから将来に向かって残していけないといけません。ただ、そのまま残していけばいいかという、決してそうではなくて、例えば亀城公園を見ましても、木はどんどん生えていきます、時間と共に。皆さんどれだけ意識されているかわかりませんが、昔の城跡の土塁が残っているんですね。そういう土塁も、そのままだと雨が降ると土が流れてだんだんと変化していきます。そういうものをただ、あるだけでは保存とは言えなくて、整備も必要になってきます。

その整備ですけど、誰かが好きなように整備していくというのではなくて、文化財としての整備というのは、本来持っている文化材の価値を高めるような整備でないといけません。では、文化財の価値を高める整備というのはどういうことかという、やはり史跡としての城跡の価値をちゃんと理解した上で整備していく。その場合には今、不幸にしてなくなってしまったも



のを再現するということもあるでしょう。それが復元と言われています。その復元はあくまでも、歴史的な事実には忠実な復元でないといけません。

そういう復元なのですが、今では日本中、いろんな所で城跡の整備、復元が行われておりまして、史実に忠実な復元というものが、ある程度、手法が固まってきました。ところがそれは、昔からこういうしっかりとした考え方があったかという、決してそうではなくて、その時代、その当時の人たちが決しているかげんなことをしてきたというわけじゃないんですが、史跡整備の考え方が時代と共に変わってきたということもあります。

そこで、今日は城郭の復元のごく古いものから近年のものまで、最初にご覧になっていただいて、そして刈谷城の史実に忠実な復元というのはどういうことかということを、刈谷城を具体例としてお話ししたいと思います。

まず、復元されたお城の古い例。これは、郡上八幡にあります八幡城です。早くも、昭和8年に木造で造られました。郡上八幡は大火でよく、町中が焼き尽くされ、一番最近では大正8年であって、城下がほとんど焼けてしまった。その後、町はすぐ復興に取り掛かったのですが、しばらくして昭和8年に、やはり郡上八幡には天守が必要だ、元々、城跡があつてそこに天守が建っていましたので、天守が必要だということで再現されました。ただ、この頃の天守の復元というのは、それほど史実に忠実という考え方がなくて、外観は当時あった大垣城をまねて造っています。外観が大垣城に似ているとい



郡上八幡城

うだけで、内部は全く違います。ですから外観を大垣城に似せただけで、八幡城が元々ああいふ外観だったかという、決してそうではない。それでもあの当時としては市民の熱意もありましたし、あのような天守を復元して、そして今ではこの天守そのものが市指定の文化財になっております。

次です。これはもう、言うまでもありませんね。名古屋城の大天守・小天守です。これは、戦災で焼失しましたが、その前は日本最大、最高の天守ということで、城郭建築としては国宝第1号に指定されたものです。その戦災で焼失したものを、名古屋の都市の復興のシンボルとして、昭和34年にコンクリート造で外観復元されました。これは、外観は非常に忠実に復元されています。その忠実に復元されたというのも、理由がありまして、これは焼失する前の古い写真、古写真です。そして、これは大天守の内部ですが、写真があります。こういう写真が800枚くらい名古屋城の場合にはあります。そして実測図です。これは焼失する前に作った実測図です。こういうものを昭和7年から5カ年計画で正確な記録を取るということで、実測調査、実測図を作成し、写真資料も残していた。そういう豊富な資料もあるので、造ろうと思えば最も忠実に復元ができる天守といえます。ただ、昭和34年のときには、外観を復元するだけで、内部は博物館施設として利用することになりました。だから内部の階数も違います。でも、当時の人たちにとっては、戦災復興のシンボルとして、非常に意味のあった天守であります。



名古屋城

これは、熊本城。最近地震で大きな被害を受けましたが、熊本城の場合は、西南戦争で焼失したものを、やはり昭和 30 年代、名古屋城の翌年ですが、コンクリートで外観復元されました。このような復興天守が昭和 30 年代にたくさん造られています。

これは昭和 41 年ですが、やはり戦災で焼失した岡山城の天守ですね。この岡山城の天守の頃までは、鉄筋コンクリート造で造って、中を博物館として使うということが多かったのですが、最近になってくると、これは四国の愛媛県の大洲城ですが、平成 16 年に木造で復元されました。八幡城と違って、こちらはかなり実証的な考証がなされておりす。

そして、新潟県の新発田城では、天守ばかりではなく、三階櫓や辰巳櫓が復元されました。ここは現在、陸上自衛隊の駐屯地で、城跡には木造の櫓と門が重要文化財で残っていますが、それとは別にこういう建物が平成 16 年に復元されました。このように、天守以外にも最近では木造で復元されています。



新発田城（左：三階櫓・右：辰巳櫓）

次は、木造で復元だけではなくて、これは有名な信長が造った安土城です。この後のパネルディスカッションで、パネリストで出演される高瀬先生も、私も 30 年以上前に 20 年計画で発掘調査をしながら復元整備していくというような事業に係わっていました。そこでは、建物は復元しないけれども、史跡としての城跡を整備していく事業をやっています。これが、発掘をしながら下のほうに残っていた石垣。それをだんだん、ある程度の高さまで積み上げていって、

最終的にこのような形で整備しております。これも、元々階段のあった所ですけども、発掘調査をして分かってきたことから、このように階段の跡を復元しています。

これは、静岡県の沼津の長浜城跡ですが、これも高瀬先生と一緒に委員会で検討してきた物件で、これは土塁があって、ここに元々は跳ね橋であったり門であったり、そういうものが造られていた、そんな跡が発掘調査で分かってきました。それを、元はこんなものがあったよというのを示したところです。これが、土塁。こちら側も土塁。曲輪が違うのですけれども、その間を行き来するような跳ね橋があって、それが後に、ここに大手道ができて門ができてというように改造された。そういうことが分かるようにということで、柱の位置だけは表しています。



長浜城跡

これも同じ城跡ですが、発掘調査によって掘立柱の跡が残ってしまっていて、掘立柱というのは、掘って、穴を開けて、そしてここに柱を立てるということなのですが、いろいろ検討していった結果、このように下の曲輪から上の曲輪に上がるような櫓状の階段があったのではないかとということで復元しています。全体の曲輪も復元していますし、こういう建物も活用を考慮しながら整備しております。そして、発掘した状況から、復元整備の過程が分かるように、現地にこういう案内板があって、これを見ながら来館者は昔の城跡に思いをはせるということができます。

これも、そういう復元の例ですが、金沢城で

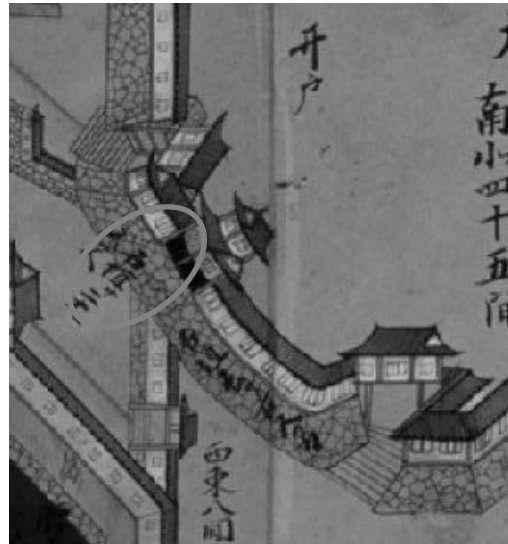
す。これは門の復元です。金沢城には重要な門が三つあるのですが、一つだけ、石川門が残っています。その後、二つの門が復元されました。絵図でこんなふうに、大きさを記されています。そして、江戸時代に書かれた図面もありました。さらに、明治時代になってから撮られた古写真も残っていました。ところが、今は全く何もなくなっていた。そこを、発掘調査をして、地面に残っている痕跡を調べて、そしてこれは石垣を全部、新しく築きました。その上に、木造で昔と同じような伝統的な工法を用いて復元をしております。これが出来上がった姿です。

ただ、昔ながらといいましても、現在の建築の構造力学上、これで大きな地震が来ても持つかどうかという計算をして、ちょっと強度が不足するところには、昔はなかったのですが、現在の耐震診断をして、その補強を検討して、プラスアルファで加えています。これは、今後利用するにあたって、安全でないといけないということがあって、そういう補強もするわけです。

そういう成果を、実物大で造るだけでなく、これは犬山城ですけども、かつての犬山城と城下がどうであったかというのを、割と大きな模型で再現しています。こうやって見ると、昔、犬山城がどうだったかっていうのが模型でよく分かります。

いよいよ刈谷城の話に入ります。これは、昔の堀跡です、そしてこの向こう側に堀も含めてお城があったわけですが、こんなふうに木がいっぱい生えています。木がいっぱい生えて、自然が豊かっているのはいいのですが、これもどんどん生えていくままというのでは、城跡の様子がよく分かりません。こういうことも、これから整備が必要でしょう。

そして、かつて刈谷城としてあったときはどんなお城であったか。絵図がたくさん残っています。この絵図というのは、一番古いのは正保城絵図と呼ばれる、この正保というのは1644年から1648年の間ですが、そういう時期に幕府が全国のお城に命じて、城と城下町の絵図を提出させるのです。すべてのお城から、こういう



正保城絵図参州刈谷城図（辰巳櫓部分抜粋）

※赤丸部分「石垣サ二丈五尺」記載箇所

図面が出ます。

そして、江戸時代の初めに武家諸法度という幕府が決めた法律によって、お城の石垣等を修理するときには、幕府に届け出を出す必要ができたのですね。幕府に届け出を出すとき、どここの部分をどのくらい石垣修理しますよということを説明するのに、その都度、こういう絵図を作って、幕府の許可を得る。ですから、江戸時代を通して幕府に提出し続けた絵図というのが、どこのお城にも残っています。

こういうものが、復元するとき非常に有力な根拠になります。これを見ますと、建物も描かれておりますし、そして大きさも書かれています。寸法が書かれていますね。例えば、この石垣のところですけど、ちょっと見えにくいかもしれませんが、「石垣サ二丈五尺」と書いています。これ、ちょっと誤字があつて、抜けている字があつて石垣高さのことなのですが、石垣高さが2丈5尺と書いてある。こういうものが、今度復元するときの一つの根拠になります。

それと、例えば、辰巳櫓ですが、二重で描かれています。そしてここに、多門櫓という櫓が取り付けのですが、多門櫓がこの二重の中の一重目の軒の下に潜り込むような形で付いている。どれだけ忠実かというのは分かりませんが、これはいろんな絵図を比較しながら検討していくのですが、そうでたらめも書いてない。

それは、こういうものの絵図とか史料を批判的に見て、正しいところをちゃんと考えないといけないのですが、こういう外観をしているとか、こういう寸法があるとかいうのは、有力な史料になります。

これもまた別の絵図ですけども、いろんな寸法が書かれています。これは石垣の長さだとか、高さだとかを計って書いてあるのですが、その中に、逆さまになって少し見えにくいのですが、本丸からの石垣の高さが、1間半と書かれています。先ほどは、下の曲輪から石垣の高さが書いてあった。今度、本丸側からの高さが書いてあります。また、このところは石垣の外側が6間半、内側が4間半と書かれていて、この幅が2間であるということが読み取れます。

1間という寸法ですが、1間というのは豊臣秀吉の時代は京都を中心に考えていて、1間は6尺5寸だったんです。それで太閤検地といいますが日本中の面積を測り直して、一律に日本中から、ある面積から年貢をどれだけ取るということを行なったんですね。年貢を、税金をちゃんと取るために面積を調べ直した。そのときに用いたのが、秀吉の時代は1間6尺5寸なんです。

そして、江戸時代になって、徳川家康の時代になると、豊臣秀吉が決めたことを守る必要はありませんので、徳川家は1間を決め直します。今度は1間を6尺にします。1間を6尺にして、日本中の面積を測り直すと、1間が少なくなりますので1間四方の1坪は小さくなります。1坪が小さくなったので、これで日本中の面積を測り直すと、自動的に面積が増えるんですね、日本の面積が。母数が小さくなるので、日本の面積は同じなんですけど、計算上の面積は増えてくる。そうすると、税金を取りやすいんですね。年貢が余計にたくさん取れる。そういうので、1間の寸法が違うんですが、じゃあ、ここに書いてある1間は一体、幾らなんだろう。6尺5寸なんだろう。秀吉のほうは京都なので京間、1間6尺5寸になるのか。あるいは江戸間、関東は京に比べて田舎でしたので、田舎間ともいいますが、それは1間6尺です。ややこしいことに、この地域では中京間というのがあって、そ

の間もあるものですから、果たして1間が幾らなのだろうって思うんですが。

これも、よく見ていくとここのところに3間6尺2寸と書いてあるのです。つまり3間と半端として6尺2寸なので、1間=6尺ではなくなってしまう。そういうものを検討して、実際の大きさも検討していくと、1間は6尺5寸のようだということが分かってきました。このようなことをたくさん絵図から読み込んでいきます。これも、そういうもので、少しずつ絵図で縦横の比例が違ったりとか、ちょっと格好が違ったりしますが、それは今ほどの測量の精度がなかったもので、こんなふうになんか少しずつ違います。ですから、絵図は有力な史料ですが、絵図だけで復元というのはありえません。絵図よりもっと大事なものがあります。それは、実際に残っているもの。実際に城跡として残っているものです。

それと、これはもう少し後の絵図ですが、先ほどの正保城絵図であった建物の櫓がなくなっています。こういう、櫓がなくなった時代の絵図もありまして、ここに書いてあるものをもうちょっと読みやすい位置にします。特にこのところ、注目してほしいのですが、「本丸南之方先年三階之角櫓御座候処」。先ほど、正保城絵図では二重で書かれていたのですが、ここでは三階と書かれています。これは、二重って言うと二階とは限らないんですね。二重なんだけど、内部は三階ってことがあります。三階の可能性が非常に高いわけです。こういうようなことも読み取っていく。

そしていよいよ、発掘調査。現地がやっぱり、一番重要です。現地の発掘調査を行います。それも、時間をかけて。発掘すると、一方では調査をするために崩してしまう、壊してしまうということもありますので、遺構を破壊するようなことは極力ないような発掘をするのですが、非常に時間をかけて、慎重に発掘調査を行います。そうやって見ていきますと、ここのところを発掘したときに、石垣が残っていればよかったのかもしれませんが、それは廃城後に払い下げられて、石垣の一つ一つまでどこかにいってしまった。じゃあ、何も分からないかということ、決



発掘調査で出た地固め遺構

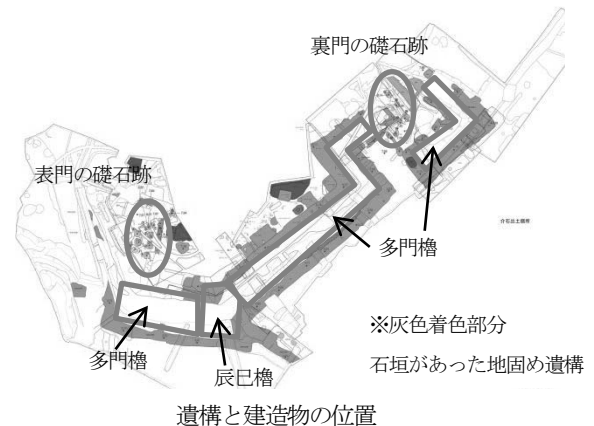
してそうではなくて、こちらの地面と比べてこのところは、丸い玉石がいっぱい入っている。自然にたまったようなものではない。これを見てみると、周囲の地盤よりいったん掘り下げて、そこに玉石をいっぱい入れた部分がある。これは、どう見てもこちらより頑丈に見えますよね。ここから石垣を築いていくのに、地面の上にそのまま石垣を築いたのでは強度が弱いので、ものすごく丁寧な仕事として、いったん掘り下げて、その下を強固にしておいて、ここから石垣を積み上げた。ですから、石垣そのものは残念ながら残っていないのですが、ここに、元々石垣の一番下の部分、裾の部分があったということは、これで確認できました。

今度は本丸側の上のほうですが、上のほうにもそういう基礎を固めた部分が発掘調査によって出てきました。そして、その発掘調査の中には、家紋が入った古い瓦、軒先の丸瓦、軒丸瓦という瓦なんですが、家紋が入っていて、立ち沢瀉の家紋。そうするとこれは、水野家の家紋ということになって、その頃から瓦葺きの城郭建築があったんだということが分かります。

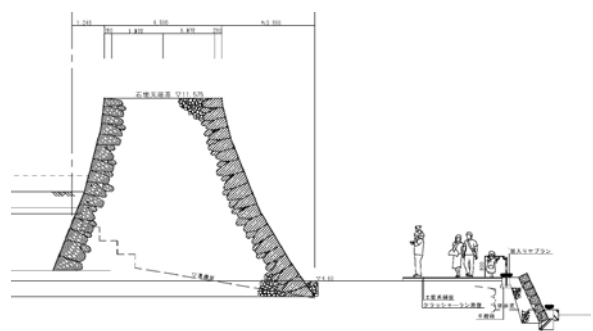


発掘調査で出土した軒丸瓦

発掘してきて、一番下の基礎の部分是这样なっていた。地業がちゃんとこんなふうにかけている。このところに石垣があったんだ、先ほどの櫓があったのはこういうところであるとか。ここが表門です。表門の礎石もあります。裏門です。裏門も礎石があります。こういうところに裏門、こっちが表門、そして櫓、そして多門櫓っていうようなことで、こんなふうに分かってくるんですね。

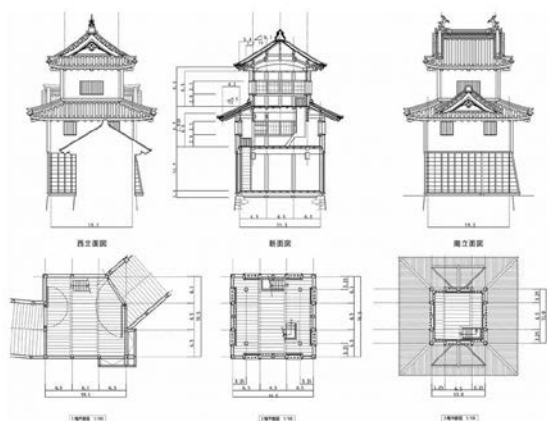


次に、その断面図、高さです。外側の地固めの遺構、ここから石垣が立ち上がってくる。内側の本丸の地固めの遺構、こっち側から立ち上がってくる。そして上の幅は、先ほどの絵図で2間と書かれていましたので、それに合うようにしていく。もちろん、勾配にしても、類似の調査を行いまして、例えば熊本城の石垣によく似ているというので、こんな反りに計画しています。これは、後ほどパネルディスカッションでコーディネーターを務めていただきます、株式会社文化財保存計画協会代表の矢野さんが見えですが、文化財保存計画協会でこういうことを非常に正確に検討して、こういうものを復元図として作ってもらっています。



石垣復元のイメージ（㈱文化財保存計画協会作成）

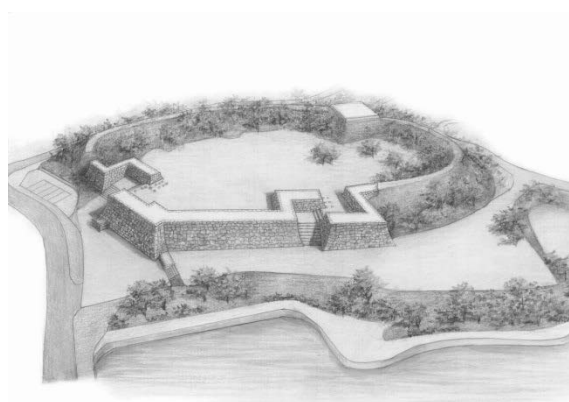
これは辰巳櫓の復元図です。最初の正保城絵図のように、ここの屋根の下に多門櫓の屋根が入っていく。そうするとここが高くなるので、やっぱりここは二階だろう。そうすると、先ほどの記述のとおり、やっぱり三階になる。外観は二重であるけれども、内部は三階だというのが、この復元図を書いてみるとやっぱりそうだなというのがよく分かります。



辰巳櫓復元図（榊文化財保存計画協会作成）

その他、表門、裏門、多門櫓、これも発掘で出ていたのですが、石垣の内側、本丸側にはどうもここに、階段があった。その一番下の地業がやっぱり出ていました。

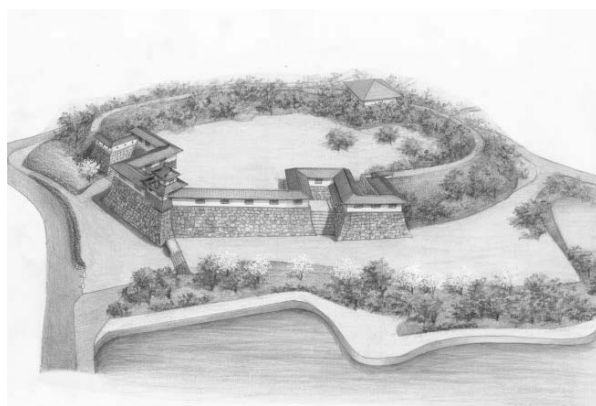
その復元図を元に、もう少し分かりやすい、立体的な図面にしますとこんなパースになります。



石垣の復元イメージ（榊文化財保存計画協会作成）

これは、石垣だけです。城郭から見て、表側を大手筋といいます。表側は立派な石垣を築いて、そして奥のほうには、今度、それよりも

っと古い形式、時代として古い新しいではなくて、石垣ができるよりもっと古い形式の土塁が、ずっと回っている、土塁と石垣が併用されていた城だというのが分かります。そしてそこに、建物を復元すると、このような復元図になります。



刈谷城復元イメージ（榊文化財保存計画協会作成）

時間も限られておりますので、私のお話はここまでにさせていただきます。どうもありがとうございました。

— 司会 —

麓先生、ありがとうございました。どうぞ、大きな拍手をもう一度、お願いいたします。また後ほど、パネルディスカッションでもいろいろなお話を伺っていこうと思います。そしてこの後、第2部の準備のためにしばらくの間、休憩を取らせていただきます。舞台上の転換などをさせていただきますので、しばらくの間、休憩を取らせていただきます。この後の開催ですけれども、2時55分くらいを予定しておりますので、どうぞ、そのお時間にはお席にお着きいただきたいと思います。それでは、しばらくの間休憩を取らせていただきます。

第2部 パネルディスカッション

— 司会 —

それでは、時間になりましたので、ここからは第2部を始めさせていただきます。

パネリストの皆さまをご紹介申し上げます。お手元のパンフレットの中にも詳しい紹介がありますので、どうぞご参照ください。

はじめに、舞台の中央側にお座りでいらっしゃいます、先ほどもご講演をいただきました名古屋工業大学大学院教授の麓和善様でございます。

そして、元奈良文化財研究所文化遺産部長で、現在も名古屋城など多くの遺跡保存整備に携わっており、亀城公園歴史的建造物等整備検討委員会の副委員長でもあります、高瀬要一様でございます。

そして、現代書館から出版されております、『シリーズ藩物語刈谷藩』著者の舟久保藍様でございます。

そして、刈谷市長竹中良則でございます。

そして、本日のコーディネーターは、株式会社文化財保存計画協会の代表取締役で、ユネスコ世界遺産の諮問機関でもある日本イコモス国内委員会の事務局長もお務めでいらっしゃいます、矢野和之様でございます。

それでは、ここからの進行は矢野様にお願いしたいと思います。矢野様、お願いいたします。

— 矢野 —

それでは、あまり時間がないので、どんどんいかないと後で意見交換会もありますので、その時間を取りたいと思います。パネリストの先生方、よろしくお願いします。

私自身をちょっと紹介しますと、私の専門は元々、建築です。文化財の修復ですとか、復元ですとか、そういうものを専門にしているものでございます。

今回、三つのテーマを掲げたいと思います。三つのテーマというのは、一つ目は刈谷城の復元の価値について。次に、復元事業に対するご意見も来ているみたいでございますので、その問題をちょっと取り上げたいと思います。三つ

目に歴史まちづくりの重要性というか、歴史を生かしたまちづくりというのがなぜ重要なのかというお話をパネリストの皆さんからお伺いしたいと思います。

すいません。スライド39と48を出していただけますか。先ほど言いました私の仕事ですが、例えば函館奉行所の復元。これは、史実に基づいた復元を設計しております。古写真があったりして、それをコンピューターで解析したり、文献を解析したりしております。

次をお願いします。これは、熊本城の宇土櫓ですが、左手側が地震前で、右が地震後です。これをなぜここで出したかというと、解体修理を30年前に担当したのが私でございます、これがよくぞ残ったと。今回の地震でもこの五階建ての櫓が残ったということで、私もちょっと涙が出そうになったわけでございます。ですから、こういう修復をきっちりやっているかどうかで、随分被害の状況が違うということでございます。

それでは、麓先生、高瀬先生、舟久保先生、竹中市長、それぞれ自己紹介をされながら、1分ずつくらいしかないので、よろしく願います。先ほどの講演の感想でもよろしいので、よろしくお聞きしたいと思います。

— 麓 —

私は、実は香川県生まれです。香川県生まれって言うと、すぐ讃岐うどんのことしか今は思われなような感じがしますが、私が生まれた所は善通寺という弘法大師が生まれた古いお寺で、小学校の頃、学校から帰ると宿題もしないで、まず善通寺の境内に行くと。そうすると友達がいっぱい集まっていて、そこで境内の中で野球



をしたりして、遊んでいたんですね。

隣の町には丸亀城というお城があります。そして、県庁所在地の高松には高松城というお城もあります。子どもの頃から、花見は丸亀城や高松城に行っていましたので、生まれ育った善通寺というお寺、そして丸亀城、高松城、高松にはもう一つ、栗林公園という藩主の大きな公園もあります。そういうのがふるさとの記憶としてあって、香川県生まれという讃岐うどんばかり食べていたわけじゃなくて、そういうちょっと文化的なこともあるんです。その辺をちょっとイントロとして自己紹介させていただきました。

— 高瀬 —

高瀬と申します。生まれは横浜なのですが、私が子どもの頃に習った歴史では、横浜というのはペリー以降だと、それ以前は本当の寒村だったという歴史を小学校のときに習ったのですが、実はその後、奈良でこういう文化財の仕事をするようになって、横浜というのはそんなことはなくて、大きな前方後円墳もありましたし、それ以前からもかなり文化を持っていた地域だったんですけれども、戦後の早い時期の教育を受けたので、横浜というのはそういうところだっというような教育を受けていて、そんなことないんだなっというのが後で気が付いて、いろいろ横浜の遺跡を見て歩いたりもしました。

仕事としては、奈良に行って、私の専門は造園なのですが、奈良の研究所では専門関係なく発掘調査をやっていました。私が特に担当していたのは、発掘調査が終わったあとを公園化していくという仕事がありまして、そのための設計の作業なんかをやっておりました。どうぞよろしくお願いいたします。

— 舟久保 —

舟久保でございます。昨年は『刈谷藩』という本を上梓させていただいて、皆さま方と過ごさせていただいたのですが、皆さまは刈谷のわが町のことを、よその人に聞かれて、なんていうふうに説明されますか。私、奈良県に住んで

いるのですけれども、周りの友人知人に、私が「刈谷がね」って話をすると、「それ、何県の話？」と、まずこういうところから始まってしまいます。ちょっと知っている人だったら、「トヨタで潤っている町ね。で、それ以外何かあるの。」と、こういう反応なんです。だいぶ失礼かもしれないのですが、大企業が多くて苦労がなくていいよね。他には何かあるのなんて言われたら、ここに住んでない私だっってむっとします。

遠い地域の話なので、多少は仕方ないというところもあるのですが、水野勝成さんのことは、最近よく聞くので知っているけど、刈谷の歴史を知らないという人が、結構ここでも多いですよ。もちろん、私が足元にも及ばないくらい詳しい先生もおられるのですが、結構、「刈谷藩って何？」っていう方もおられて。私の友達と似たり寄ったりというのはちょっと寂しいかなど。なんでかという、そういうお城とか城下町というのが、日常で目にする風景から失われているということなんです。日常でそういう風景を目にしない。先ほど、麓先生のご講演で絵図と発掘と、そういうふうに照らし合わせてお話がございましたけれども、そういう検証というのが、非常に細かい作業であるというふうなこと、かなり私も勉強をさせていただきました。今日はよろしくお願いいたします。

— 市長 —

先ほど、ごあいさつをさせていただきました。竹中でございます。自己紹介するほどではありませんので、即、お話に入らせていただきたいと思います。私はやはり、刈谷というのは歴史を大切にできる、そういう資源のある町だというふうに思っております。先に行かせていただきました、築城 480 年記念会のときに、水野家の方々にお集まりいただいたんですが、水野家というのが、本家の水野家は江戸末期、最後には茨城県の結城藩で終わられたのですが、それ以外にも分家が 4 家ございまして。山形の水野、千葉県の水野、沼津の水野、そして和歌山県の新宮の水野という 4 家にお集まりを賜りまして、築城 480 年記念会というのを平成 25 年 8 月 10 日にやらせていただきました。

た。その際には、徳川宗家の徳川恒孝公、第18代のご当主でございますが、お越しをいただきました。この刈谷の地へ初めて足を踏み入れていただいたわけでございますが、そのときの徳川恒孝公の講演の中から2点、大変刈谷藩に関して感謝をしているという、そういうお話をいただきましたので、それをお伝えさせていただきたいと思います。

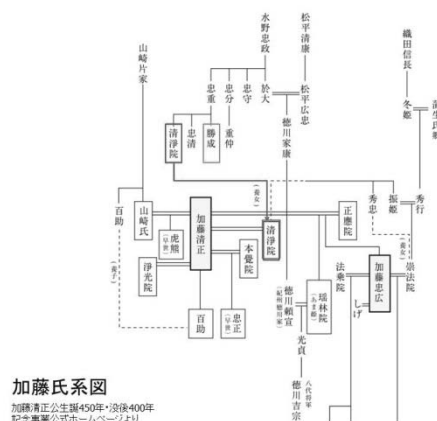
1点は、皆さんもよくご承知の於大の方につきまして、刈谷城から岡崎城へ於大姫が嫁がれたということはご存じのとおりでございます。於大の方は15歳で家康公をお産みになられたわけでございます。その意味でまず1点目が、家康公をこの地に運んでくれた、その意味で刈谷は日本の歴史を変えた土地である。そういう土地柄なんだということを、大変感謝をいただきました。

もう1点が、於大の方から少し後のお話ですが、戦国時代でどこと組むかというのが、生き抜く選択の上で、大変な時代でございます。当時、松平家は今川と結んでおりましたし、刈谷の水野家は織田方でございます。ところが、刈谷の水野家、当時忠政公から信元公の時代になったわけですが、今川が上洛に失敗をいたします。織田に負けまして、上洛に失敗をいたしましてからは勢いのある織田方に付くようにこの刈谷の水野家が仲介を取って、織田と水野と松平で起請文を書いて、それを焼いてお酒と一緒に酌み交わしたということを、史実としてご紹介をいただきまして、このときから水野家は徳川家、松平家の守り神になっていただいたんだということで、刈谷藩に対しては大変敬意を払っていると、そういうお話をいただいたことをご披露申し上げて、私の紹介に代えさせていただきます。ありがとうございました。

テーマ1：刈谷城復元の価値

— 矢野 —

ありがとうございました。それでは最初のテーマであります、「刈谷城復元の価値」ということでお話を進めたいと思います。まず、私のことで申し訳ないのですが、私は熊本出身でして、熊本市民、県民というのは実は、細川さんの治



加藤家系図

世が長かったのですが、加藤清正に対して、ものすごく親近感というか、畏敬の念を抱いております。「せいしょこ（清正公）さん」という名前と呼んでおります。

もちろん、皆さまご存じだと思いますが、勝成公の妹に当たる清浄院さんが加藤清正の正室として入っております。このときは、家康公の養女として入っていますから、関ヶ原の直前だったと思いますけれども、そういう時代だったといえますか、多数派工作の一環だったのかもしれない。そういうことでこの刈谷と非常に関係があるということですね。

それからもう一つ。私の先祖は一時期、佐々成政に付いて、国衆一揆があったときに地元で戦っているみたいですが、うちの先祖は討ち死にしちゃったみたいです。勝成公もそのときいらしたという話も聞きますが、勝成公はやっぱ強かったんですね。諸国を流浪しながらものすごくいろんなことを学ばれたし、実際、戦も強かったということじゃないかと思いますが、この刈谷藩は、もちろん徳川家との関係がものすごく強いわけでございますし、全国の藩の中で特別な藩だったんだろうなという感じがしますが、その辺を舟久保先生からいろいろお話を伺えればというふうに思います。

— 舟久保 —

水野家というのは、市長さんのお話にもありましたように、家康の外戚に当たる家になるんですね。水野忠政という人が刈谷城を築かれて、その娘の於大の方が松平広忠に嫁がれて家康を

お産みになりました。

忠政の次の水野信元が城主のときに、今お話にもあったんですが、水野家というのは松平家と手を切って、いったん織田のほうに付くんですよね。なんですが、後々信元は家康を助けるためにかなり動くんですね。桶狭間の戦いがありましたけれども、今川義元が討たれたときに、家康はそれを知らないで大高城でじっとしていたんです。それを家康に知らせて岡崎に帰らせたのが信元ですし、後に信長との間に同盟を結ばせるということをしているんですね。

信元という人は、於大の方が「兄の信元は気が短くて」なんてことを言っていたそうなのですが、実はそういうふうに、人を見る目とか情勢をしっかり見据えていたのかなというふうに思います。

信元の次の忠重という人、この2人は兄弟ですけれども、この人もそのときどきで冷静に信長に付いたり、秀吉からのすごいラブコールを受けてそっちに付いたりということをするんですが、最終的に家康に付くんですね。で、家康の片腕として活躍をして、側近20将の一番上に描かれるほどになっています。これですけれども、家康の右下が水野忠重です。ちなみに、左側は長沢松平家の康忠という人で、この人も家康の親戚に当たる人です。



徳川二十将図（賢忠寺所蔵・抜粋）

初代藩主の水野勝成という人は、この忠重の長男になるんですけれども、この人はご存じのとおり非常に面白い経歴を持つ人なんですね。猪武者とかよくいわれるんですが、喧嘩とか戦とかが大好きなんですね。21歳のときに家を飛

び出して、中国地方から九州のほうまで戦場を渡り歩くんですね。刈谷へ戻って跡を継いで以後は、関ヶ原の前哨戦になった大垣城攻めとか、大坂の陣で活躍して、刈谷から大和郡山、その後福山藩と転封して非常に家臣領民に慕われる殿様になられます。

余談なんですけれども宮本武蔵とも親交があったというのも面白いエピソードの一つです。円明流の剣術指南を受けているんですね。宮本武蔵は大坂の陣のときに勝成の長男勝俊の護衛役を務めていました。しかも、勝成の家臣で武者奉行だった中川志摩之助の子どもが武蔵の養子になっているんですね。

先ほど矢野先生のお話にありましたように、勝成の妹の清浄院という人が加藤清正に嫁いでいますし、その間に生まれた娘の瑤林院という方が徳川頼宣に嫁いでいます。頼宣は初代紀州藩主になっている方です。

水野家の宗家は勝成の後、福山から結城藩と続いていくのですが、数ある分家は岡崎から山形、あるいは新城から安中、それから吉田から松本、沼津というふうに所替えをしながら続いていくんですね。刈谷は全部で9家の大名が治めたわけですが、いずれも18松平家といわれる松平家の一門と譜代大名であって、22人の歴代殿様のうち、約半分の人が幕府の若年寄、あるいは老中という要職を務めています。

そうはいいながらも、幕末、松本奎堂という人が倒幕の反乱、天誅組の中心人物として刈谷から出ています。それが発端になって徳川幕府が倒れるというのですが、これも歴史の面白さなのかなと思います。ですから、刈谷藩というのは水野家をはじめとして、常に徳川家の命運を左右してきた重要地だということに言えると思います。

— 矢野 —

ありがとうございました。次に、城郭としての刈谷城の価値について、専門家の立場からお聞きしたいと思います。まず麓先生に、建築史家という立場からお願いします。

— 麓 —

はい。先ほどの私の講演でも申しましたが、13 番映してください。復元のパースですが、ここにあるのは十朋亭で、元々はここにもう一つ、櫓が建っていたんですね。お城というと壮麗な石垣があって、そして天守があってというのを思い浮かべるかもしれませんが、江戸時代のお城、全国で 300 何十かの藩があってそれぞれにお城があったようなのですが、決して全てのお城に天守があったわけではなくて、こういう櫓が天守の代わりを果たしていたんですね。

例えば、先ほど私、丸亀城ということを申しましたが、丸亀城は今天守として重要文化財になっていますが、あれも元々は本丸の中の角っこにある三重の櫓。それが天守とみなされて今は、天守として重要文化財になっているんです。そういうお城は多いんです。弘前城なんかそうです。

そういう天守のなかったお城なんですけど、天守がなかったら城の価値がそれだけ低いかというとしてそうではなくて、刈谷城に特有の個性みたいなものがあるんですね。それは、復元イメージパースでもそうなんですけど、土塁がまずあって、土塁の一部、大手筋から見える、城下からよく見える所には立派な石垣を築いて、天守の代わりに櫓もあるし多門櫓もあってというような形でできていまして。それ以外の所はむしろ、近世城郭よりももっと古い要素、時代が古いという意味じゃなくて、要素として戦国時代のような土塁がずっと回っている。元々はこの土塁の上に、やっぱり堀も回っていたんですが、こういう土塁と石垣と両方持ったお城が幕末まであった。それが非常に刈谷城の個性になっているわけです。他のお城にはない個性がある。それはやっぱり、それだけでも貴重ですよ。

後で考古学的な特徴も高瀬先生から教えていただけるとは思うんですが、まずはやっぱり、刈谷城にしかない、350 あるお城の中でも特殊な個性を持ったお城である、その一つが石垣と土塁を併用しているという点が挙げられると思います。

— 矢野 —

ありがとうございました。次に、歴史上の視点から舟久保先生に価値を語っていただきたいと思いますが。

— 舟久保 —

歴史的に見るとということなんですけれども、全国に比してもちょっと分かりにくいので、三河ではどうだったのかってことなんですけど。西三河限定でいうと、中世から築かれた城っていうのは 330 ほどあるんですよ。刈谷にも中世の頃っていうのは五つほど市内にありまして、刈谷古城もそうなんですけど、野田城とか半城土、絵下とか小垣江古城がありましたけれども、いずれも戦国の乱世の中でつぶれたり廃城になっていきました。その中で、江戸時代に入って一国一城令で残ったのは四つの藩と四つの城ということなんです。岡崎城、西尾城、挙母城、そして刈谷城。

明治 6 年、廃城令によって全国の城の多くが取り壊しになるんですが、明治政府が各地の城を利用するもの、処分するものということで分けて、兵営等で利用するものは陸軍省の管轄で残しておいて、残りは大蔵省の管轄にして、処分しようということにしたんですね。残念ながらこの西三河の四つの城は廃城となって、散逸してしまいましたが。その四つのお城、現在どうなっているかといいますと、岡崎城はご存じのとおり復元されているんですね。西尾城も、平成に入ってから本丸二の丸の整備と丑寅櫓の復元がなされていると。最近、天守台の石垣も復元ができたそうなんです。挙母城も隅櫓の復元



岡崎城

出典:webサイト 名古屋観光



西尾城（本丸丑寅櫓）

出典:webサイト 名古屋観光



挙母城（隅櫓）

出典:webサイト Wikipedia



刈谷城（亀城公園）

一国一城令で残った西三河四藩の城郭の現在

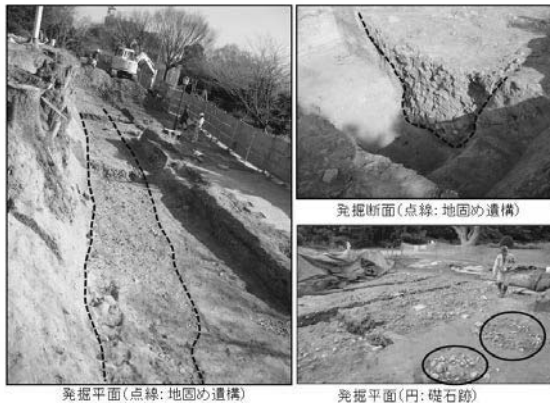
があります。何もないのは刈谷城だけなんですね。そういう西三河の四つの城が並び立つことによって、地域として点から面になっていくということもできるので、広域で考えても面白いことになるんじゃないかなというふうに思っております。

— 矢野 —

ありがとうございます。それでは、高瀬先生に遺跡としての価値ということでお話しいただければと思います。

— 高瀬 —

7 番の写真を。先ほど、麓先生のお話でも出てきましたが、この地固め地業ですね。



発掘調査

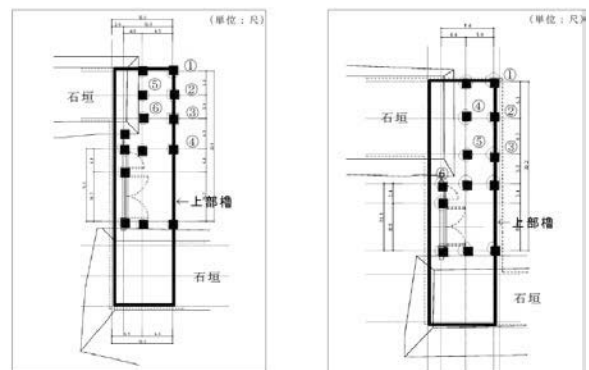
こういうやり方をやっているのは実は、刈谷城しか今のところ見つかっていないです。ここは地盤から言うと、洪積層の割としっかりした地盤のところだと思うんですけど、それでもさらに、地盤をもっと強化しなきゃいけないという考え方があったんだと思うんですが、地固め地業をやっているんですね。だから、もっと柔らかい沖積層なんかに石垣を築く場合は、下に胴木といいまして、松の丸太を入れて石垣が沈下しないようにってことはやられているんですけども、そうじゃないところでもこういうやり方をやっていたというのが、私は発掘現場を見させていただいたときに一番の驚きでした。

実は、このやり方というのは古代からありまして、これの元々のルーツは中国なんですね。

平城宮にもこのやり方をやっているんですけども、平城宮は掘り込み地業というふうに呼んでいます。やっぱり上に木段を築いて、その上に建物を建てるんですけども、そのときに下の地盤が弱い所については、こういうふうに基づ地業をやっているというので、この刈谷のやり方がどこからきたのかというのが、すごく興味深いところなんですけれども。

城の石垣なんかの文献を見ましても、根太というか胴木については出てくるんですけど、このやり方は出てこないんですね。出てこないんですけど、実際はこういうことが行われていたんだっていうことが刈谷城で分かったわけで、これはすごく価値があるなと思いました。

それからもう一つは、門の部分、表門と裏門と発掘しているんですけど、両方とも石垣の上に櫓門が全部乗っていないで、外にはみ出す形なんですね。平面図のほうの方が分かりやすいかもしれない。52 番見ていただくと、ここは裏門の所ですけども、ここにこう、こちらの石垣からこちらの石垣にかけて、櫓門が乗っかっていて、その下を入れて、門の下を通ってお城の本丸に入るんですけど、北側の柱ともう一つ、棟通りの柱も石垣から外へはみ出しているんですね。それから表門のほうも同じように、表門のほうは石垣の基礎地業の残りが悪いんですけども、表門がこういう方向にかかるんですけど、その外に礎石を置いて柱を立ち上げているっていう。こういう作り方も高知城の大手門に、唯一、部分的に柱が外に飛び出しているものがあるんですけど、櫓門というのは石垣の上に収まっているのが通常の形態なんですけれども、



(亀城公園歴史的建造物等整備検討委員会資料参照)

刈谷はそうっていない。これも、普通だと考えにくいんですけども、どうも当初からこういう考え方で、石垣の上に収めるって考え方じゃなくて、外に張り出そうという考え方で建てたようで、こういうところもすごく刈谷城の特色と言えらと思います。

それから、もう一つは刈谷の近代の歴史ということになると思うんですけども、石垣の石が全て抜かれているんですね。これは明治の廃城になったあとの払い下げの過程で、石垣の石をどこか他の所に転用するために持っていったと思うんですけども、そういう例は、例えば兵庫県の篠山城でも、明治になってから河川の護岸に石垣の石を持っていったりしているんですけども、一番下の2段くらいは、まだ現地に残っているんですね。刈谷城の場合は、徹底して石垣を外してよそへ持っていった。これはある意味では、刈谷の近代化の歴史の中で、石垣の石を他に転用しようっていうことで行われたんだと思って、これも他ではあまり見ないってことでは、一つの歴史かなっていうふうに思いました。

— 矢野 —

ありがとうございます。それでは、次になぜ城郭をはじめとする歴史的建造物を復元するのでしょうか、というテーマに対して、ちょっと皆さんにお聞きしたいのですが、50 番をお願いします。



ワルシャワ歴史地区

これは、世界遺産になっているワルシャワの歴史地区です。ワルシャワっていうのは、第 2

次世界大戦で壊滅的な被害を受けて、ほとんど瓦礫になったんですね。それから、復興した。だから復元です。歴史的な町並みの復元です。

普通だったらこれは、復元だから世界遺産になるわけではないんですが、そういう市民の熱い思いのもとに復元されたというプロセスを評価されて世界遺産になっているというわけなんです。

それから、首里城の正殿なんかも、あれは沖縄県民の一つのアイデンティティーを表す、あそこに首里城が復元されたからこそ、中心的な精神的支柱ができるということなんです。

こういうふうに、やはりいろいろな地域における中心的な存在、精神的な支柱っていうのがなんでできるかというと、その理由は歴史的建造物があるからだろうと思われま。それでは、そのことについて、麓先生。

— 麓 —

私、先ほどの基調講演でスライドをご覧にしながら説明しましたよね。あれ、スライドがなければ私の話だけではとても理解していただけなかった。先ほど、高瀬先生が発掘で分かってきた特色、説明していただきました。あれも図面がないと、言葉だけではなかなか伝わりません。

じゃあ、今のこの亀城公園を見ると、あそこに行って、城跡なり刈谷城の個性なり、他のお城にはない特性みたいなのが、誰が分かるでしょう。そこに今日ご覧にいらしたようなパネルがあってそれを読む、そしたら少しは分かるかもしれない。でもそれよりも、一番いいのは元のような状態で目の当たりにすることができれば、これはもう百聞は一見にしかずですよ。見て、先ほど説明してもらったような門の特殊性、表門、裏門こうなっていますよ、これ特殊ですよっていうのは、その門が復元されていると目の当たりにできてすぐ理解できるんですよ。

やっぱり、なぜ復元かと言われたら、一番いいのは模型よりも何よりも実物大でそこにあるっていうことが一番よく理解できるということだと思います。

— 矢野 —

ありがとうございました。高瀬先生、何かありますか。

— 高瀬 —

私は平城宮で仕事をしていました。平城宮では朱雀門という門と、その奥にある大極殿というのと、役所の建物ですとか東院庭園だとか復元やっています。

それやる以前はどういう状態だったかという、ほとんど元は田んぼだったんですね。地上にはほとんど何も見えない状態だったんですけども、その頃、近鉄線に乗っていて、高校生なんかが話聞いていると「平城宮に行っても何にもないぞ」って。行っても何にもない原っぱだという印象だったんですけども、そこで平城宮の整備では幾つか拠点になる建物は当時の形を復元して、そこから平城宮全体に対するイメージを心の中に持ってもらって平城宮全体を見学していただこうと。そういう目的で幾つか拠点になるところの建物を復元したんですね。だから、刈谷城はさっき、私が「近代化の歴史の中で石垣まで全てなくなってしまう、これも歴史だ」と言いましたけれども、刈谷城に行くと、今、麓先生がおっしゃったように、当時の形を思い浮かべようと思っても、現状では思い浮かべることができないんですね。ですから私はそういう意味で、当時の形を思い起こすのに必要な復元はすごく意味があるなというふうに思っています。

— 矢野 —

ありがとうございました。それでは、竹中市長、お願いします。時間がありませんので、ものすごく熱い思いを持ってらっしゃると思いますが、手短に。

— 市長 —

分かりました。先ほど来、いろいろお話をさせていただいておりますので、本当に手短にお話させていただきたいと思います。

先ほども申し上げましたように私ども、企業城下町と言われているのは、皆さまよくご承

知のことと思います。そういうものを私どもとしては、公共施設の中にも残していこうということで、皆さま方もご存じかもしれませんが、駅の北口にあります産業振興センターがあります。その中に、あいおいホールというホールがあります。展示会だとか産業見本市みたいなこと開催されるホールなんですが。その屋根は、繭の形になっているということは皆さま方ご存じでしょうか。

刈谷は豊田佐吉さんの自動織機が産業の発祥ですので、糸の繭を連想していただくような、そういうものを少しでも残したいということで象徴的に、屋根は繭の卵型といいますか。サナギになる前の、そういう形を象徴しております。

それから、この総合文化センター入っていただきましたロビーの所に、この総合文化センターオープンするときに、記念に書いていただいた、大きな墨で書いていただいた軸があるんですが、その文字は糸へんの方と書いて「紡ぐ」であります。これは紡織の「紡」でございます。そういう刈谷の歴史を少しでも皆さまに言い伝えていきたいというようなことで、そういうものも残しておまして。刈谷城の復元ということも、先ほど来お話のとおり、姿形で見えるものをなんとか、形として残していけたらなというのが私の思いであります。

テーマ2：刈谷城復元事業に対するご意見について

— 矢野 —

ありがとうございました。それでは、次に「刈谷城復元に対するご意見について」をテーマにしたいと思います。

まず一つ目は、「史実に基づいた復元は必要か」というご意見があります。私も係わっていますが、この復元のプロセスが大事で、ちゃんとした調査とか考証がなされているとか、これが一番大事なことでございます。恐らく、これは国指定史跡に準じたようなプロセスを踏んでいるんだろうなと思っております。私も技術者として、そうでなければなかなか、一緒にお仕事できないなというふうにいうふうに常々思っているんですが。これはもうこういうしつ

かりとしたプロセスを踏むということで参加させていただいている状況でございます。

名古屋城なんかも天守の本造復元ですね。先ほども麓先生が模擬天守、いわゆる史実に基づかない天守が過去には造られている例をご紹介いただいたのですけれども、現在は史実に基づいてちゃんとやらないと駄目だということです。特に国指定史跡だと、そのプロセスがないと絶対に許されないという状況になっておりますので、その点、麓先生お願いします。

— 麓 —

先ほど、私は実物があるとそれが一番よく分かるって話をしましたが、これが史実に忠実かそうじゃないか。これ分からないですよ、一般的には。ですから、いいかげんなものを作ってしまうと、そこを訪れた人たちはみんな、いいかげんなものをいいかげんだと思わないまま、昔はこういうお城だったんだと思ってしまい、間違ってしまう。それは非常に悪いことだと思っています。そういうまがい物で訪れた人をごまかしてしまうということは。結果的にそういうことになれば。

ですから、やっぱり名古屋城のように焼失前にしっかりと実測図がある、これは一番史実に忠実でしょうけれども、そうじゃない場合にしても、なんとか可能な限り、情報としては歴史的な事実を解き明かす。そのために、今日申しましたような絵図もたくさん、検討しますし、発掘調査もして、元はどうだった、そして緻密な考証、昔はこうだった、最も可能性の高い状態で復元すると。そうすると、来てご覧になった市民の皆さまにも、これが昔あったんだと思って見ていただいても、私は全然問題ないというふうに思っています。そういうふうに誤解を招くような復元はしない。そうするとやっぱり、史実に忠実な復元とせざるを得ないということです。

— 矢野 —

ありがとうございます。それでは、二つ目は「城郭復元における耐震に対する考え方」についてということで、お話しいただけたらと思

います。

熊本地震がございまして、熊本城の状況っていうのはよくテレビに出てきますが、20 から 25 のスライドをお願いしたいと思います。2 回、地震がありまして、2 回目の地震でかなり壊滅的にやられているんですが、こんな状況ですね。

次、お願いします。これは、ちょっと大変な状況になっているんですが、上は復元されたものです。で、実はこの下の壊れている所は明治 22 年の地震の後に一遍、直したところなんです。今回の地震でかなりな部分が近代に修理したところがまた崩れていると。これをどう見るかということがございます。

次、お願いします。これも、櫓ごと倒壊した状況ですね。

次、お願いします。これは、私が昔やりました宇土櫓ですね。



熊本城宇土櫓 (出典：熊本城公式 facebook)

次、お願いします。宇土櫓は本物ですが、この飯田丸五階櫓は復元されたものです。

その中で今回、実験をいろいろやろうという計画がございまして。石垣の震度実験とかやって、本来、清正公が造られたときの石垣と、新しく近代になって修理されたようなやり方がどう違うのかとか。そういうものもちゃんと検証する方向で進んでいるようでございますので、これをもって、石垣の安全っていうのがかなり分かってくるんじゃないのかなっていう気がします。この辺について、麓先生。

— 麓 —

私、建築が専門ですから、例えば文化財以外

の建築ですと、名古屋駅前の超高層ビルを造るにしても、頑丈なほうがいいですよ、とにかく。コストさえ許せば、頑丈なほうがいいと思います。

でも、古い文化財としての建物、それを木造建築、形もそのまま修理するとなると、これはそう簡単に構造計算とか耐震診断とかっていうのができることではなくて、文化財建造物の修理も非常に苦労します。

お城の場合、基礎部分は石垣になりますが、石垣となるとこれはもっと難しい。例えば、崩れている石垣を見ると正面の石垣だけではなくて後ろのほうにも小さな石がたくさん入っています。そして、土も入っています。こういう状態で積まれています。これを頑丈にするために例えば、コンクリートで完全にながちにながちに固めてしまう。昔、そういう修理をした例もあるんですけど、じゃあ、そういう補強をしたらいいかという、これもまた文化財として長い目で見たら困るんですね。

何が困るかという、やっぱり時間とともに劣化します。コンクリートだって、名古屋城、今は耐震問題があつて木造で建て替えようかなんて検討もされていますが、やっぱり鉄筋コンクリートの寿命というものがあります。そのときに、やっぱり積み直し工事が、修理工事が必要です。長い目で見たときに、修理工事が将来できるような方法というのも一方では考えておかないといけない。完全にコンクリートで固めてしまうと、今度、そのコンクリートが劣化したときの修理が非常に困難なことになってしまう。

そうすると、やっぱり伝統的なほうがいい。ただ、伝統的な手法を用いるんですけど、それも伝統的な方法を用いたら崩れてもいいですよってわけにもいかない。ですから、非常に難しいんですね。それが、今回熊本城でこういうことになりましたので、熊本城ではそういうことを非常に真剣に検討しているところです。それは今度、全国の城の復元にも熊本城の方法というのが生かされてくるんだろうと思って期待もしておりますけれども。

— 矢野 —

ありがとうございました。それでは最後に、「刈谷城の復元には反対である。福祉や子育て支援を充実させてほしい」というご意見もありますが、これはもう市長さんに答えていただくしかないですが、お願いします。

— 市長 —

分かりました。福祉や子育て支援っていうのは、大変重要な政策であると思っております、常々こちらのほうにも大変重点を置いておるところでございます。

例えば、平成28年度の当初予算で、563億円というのが刈谷市の一般会計の当初予算ですが、それを100パーセントとしまして、子育て関係あるいは福祉関係などの充実のための民生費とか教育費というものの合計額を見ますと、約304億円ということになります。率に直しますと、一般会計で約54パーセントということになります、半分以上でございます。

参考にこれを西三河地域周辺と比べてみますと、安城市で約46パーセントになります。豊田市で約42パーセントということになっております、私どもがトップクラスということになっております。

いわゆる社会保障につきましては、ハード面、ソフト面で様々な事業を実施し、全国的に見ましても財政力が比較的豊かなこの西三河地域の中でも、最も充実した内容になっているものというふうに思っております。

また、安心安全なまちづくりという点は、私が最も目指している施策でございまして、防犯カメラの設置だとか、防犯灯のLED化というのは強力に進めさせていただいております、また各ご家庭の地震対策に関する補助等も充実させていただいているところでございます。

現時点で日本全体が人口減少時代、あるいは少子高齢化というふうにも言われておまして、各自治体、本当に人口減少や過疎化に悩んでおられるわけですが、そんな中でまだ刈谷は、本年の1月1日現在でも15万155人ということで、昨年の7月1日に人口15万人を突破いたしまして、まだまだ人口増加を見ている都市でござい

ます。昨年の1月1日と比べましても956人の人口が増えております。かつては昭和40年代、50年代ですと、1年に2000人ずつくらい増えていたんですが、さすがにこの時代になりますと、その増加率も多少落ちておりまして、今では人口が1年で1000人ぐらい増えるというような、そういう状況になってきております。

そんな中で、15万人の市民の方々が住んでよかったと、また、住み続けたいと言っていただけのようなまちづくりを目指しています。ちなみに、2年に1回、私どもでは5000人の方々の市民のアンケートを実施しておりまして。最新の市民アンケートでは、5000人の方々の中で、住んでよかったと言っていた方は82パーセントでございます。住み続けたいと答えていただいた方は89パーセントお見えになるということでございますので、私は福祉教育の充実、安心安全のまちづくりの充実と同時に、歴史文化を継承し町への愛着や誇りを高めることが大切な取り組みであるというふうに思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

テーマ3 歴史まちづくりの重要性

— 矢野 —

ありがとうございます。それでは、最後のテーマですが、「歴史まちづくりの重要性」ということについて議論したいと思います。これは歴史まちづくりというか、歴史的な資産を生かしたまちづくりだと思いますが、これについて、全国でも今、観光で潤っているところというのは歴史的な資産が多い所ですね。金沢にしても高山にしても、もちろん京都は断トツですけども。こういう中で、観光資源としても重



出典:国土交通省「歴史的風致維持向上計画(イメージ)参照

歴史まちづくりのイメージ

要でもありますし、先ほど言いましたように地域の誇りというか、そういうものを形成するために何が必要かという、それはやっぱり歴史なんですね。歴史と文化だと。その辺を取り組む自治体が多くなってきています。愛知県内でも犬山、名古屋、岡崎などは歴史的風致維持向上計画という計画を作って、歴史まちづくりを推進していこうとしているところでありますけれども、これについて麓先生、高瀬先生、舟久保先生、よろしくお願いします。

— 麓 —

最近、全国の町で再開発後は同じような町になってしまいます。駅を降りてこれは九州の町なんだろう、東北の町なんだろう、北海道の町なんだろう、あまり町としては分からなくなっている。でもそれは最近のことで、戦前までは少なくとも、風土に合った都市、建築というものがあった。刈谷のように城下町は城下町らしさ。善光寺のような門前町らしさ。あるいは妻籠のような宿場町。農村とか山村とか漁村の集落。そういうものがそれぞれの個性、「らしさ」になっていたんですね。そういう「らしさ」、刈谷でいえば刈谷らしさっていうものをこれから求める、出していくとなると、歴史とは無関係ではないと思うんですね。そういう町の個性を出すために歴史が非常に重要になってくると思います。

— 高瀬 —

私は、文化財とか歴史もそうですけど、その大切に思う気持ちというのは自分の親を大切に思うとかですね、さらにその親、おじいさんおばあさんを大切に思うという心と通じているんじゃないかなと思っています。ずっと、親の親って辿っていけば、江戸時代になり、さらにもっと遡っていくわけですから、自分の命というのはずっと、つながってきて今があるということだと思いませんか。ですから、そういうことだというのが一つ。

もう一つは、遺跡を発掘していると思うんですけども、カーナビというのは、人工衛星の電波を受けて現在の位置を特定するという、これ

は20世紀の発明では、ものすごい発明だなと私自身は思っているのですけれども。あれはどうして目的地へ行けるかという、現在、自分がどこにいるのかというのが分かるからなんですね。自分の現在位置と目的地の位置関係からこっちへ行けという指示が出てくるわけで、遺跡はそういう意味では時間軸で、今どこに自分がいるのかということを知らせてくれる、市長さんも、昔のことを学んで将来を見るべきだというふうに最初におっしゃっていましたが、でも、まさに温故知新というのはそういうことだなと思います。

— 舟久保 —

歴史の中でも、郷土史というのは特に大事だと思います。地域が発展していく上で非常に不可欠だと思います。その歴史を子どもたちにどうやって教えていくのかということですが、先ほど申し上げた勝成にしても、この人は刈谷の偉人なんだよって言って、でも実はおやじと喧嘩して家出して、15年もあっちこっちほつつき歩いていたんだっていったら、子どもたちもえーってということになるんですけれども、そこから議論というのが始まっていったらいいと思うんですよ。偉大なことを成す人というのは、やっぱり人と違っていて乱暴者だった若い頃も含めて魅力的な人間性とか行動力があるんですよ。そういう世間を渡り歩いた様々な経験が人を高めると。思いやりのある人間性が築かれていったんだよというところを子どもたち同士で議論する。一方通行で教えるんじゃなくて、議論していく。

それと歴史の現場を見る。こういうところにお城があったんだよとか、勝成とか水野家の関係する文書もこういうのがあるんだよという実物を見る。これがセットで歴史を学ぶということだと思うんですよ。

以前も、三河人とか三河武士についてお話をさせてもらったこともあるんですが、三河人というのはかつて、2度天下を取ったと言われていたんですね。1度目は足利尊氏を支えて室町幕府を作り上げたときです。足利氏は三河の守護だったんですが、そのときにその一族だった三

木とか細川、一色、吉良という一族の人たちが足利尊氏を征夷大將軍に押し上げて室町幕府を開くに至った。

2回目というのがご存じのように、徳川家康を支えて天下統一をなして、徳川幕府というのを打ち立てたときです。3度目がトヨタだっている人もおられるんですが、とにかく、そういう時代を動かしてきた背景というのには、必ず三河人がいるんだということを申し上げておきたいと思います。

— 矢野 —

ありがとうございます。ちょっと私の意見を言わせていただきます。

歴史があるということはどういうことかと言いますと、その土地に品格があるかどうかを表わす、非常に大きな要素だと思います。例えば熊本地震で熊本城が先ほど見せました状況なのですが、実は一番、私が問題視しているのは、熊本城は国の指定だし、都市公園にも指定されていますが、城下町がこのままいくと壊滅するのです。要は、町中にある町家だとかそういうものが、かなり被害を受けております。それは必ずしも指定物件だけではないので。それを救わないことには都市としての品格がなくなっていく。その瀬戸際にあるということなんです。

文化財というのが単なる文化とか歴史だけではなくて観光的な要素も当然ございますし、都市、まちづくり、都市政策の一環として考えないといけません。今回も、主管課は公園緑地課でいらっしゃるんですね。教育委員会ではないですね。都市政策の一環として考えていかないと、観光にもならないし、自分たちの町に誇りが持てないという、これが一番大きな問題になるんだろうなと。そのために何をしなければいけないかということを、この亀城公園、刈谷城の復元を基にもう一回、考え直してみることが必要じゃないかと思います。

時間がなくなってきた、もうすぐ終わらなさいいけないのですが、これは前から私も感じているのですが、先ほどのワルシャワの例なんかも、これは市民がそういう方向に向いたんですね。全員の総意とまではいかないにしても、自

分たちの町をどうやって作っていくかという熱い議論をした中で、いい復元ができればそれが理想形だと思いますね。

最後に竹中市長にその辺を踏まえて、よろしくお願いします。

— 市長 —

いろいろ先生方のお話をたくさん賜りましてありがとうございました。私も全くそうだなというふうにお聞きしていたわけですが、まちの歴史を市民に自然に伝承でき、まちへの愛着や誇りを一層高めることで、未来の刈谷市の担い手になっていただけるというふうに心から願っているわけです。

歴史はそのまちの個性でありまして、魅力があります。だからこそ、今、全国的に自分のまちの歴史に立ち返っているのだというふうに、私も受け止めておりますし、まちの未来を考えるからこそ、歴史まちづくりに取り組んでおられるんだろうと思っております。

とりわけ、先ほど来申し上げておりますけれども、現在は地方創生、地方版総合戦略というようなことで、各まちが、どうこの先、生き延びていくのかというようなことで知恵を絞りあっている、そういう時代でございまして。これからは都市間競争といいますか、そういう激化の時代に入ってくると思っております。いかに消耗戦を戦い抜くかというのがこれからのまちづくりの一番大事な視点になってくるんじゃないかなというふうに思っています。

いかに定住人口を増やし、交流人口も増やして、何年か先まで持続可能で自立し、発展し続けられるような、そういう行政運営のためにもこういう歴史文化を大事にしていくということが、私は大事なことになっていくというふうに考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

— 矢野 —

ありがとうございました。それでは、これでパネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。次に意見交換会の時間が、あまりなくなるといけませんので、これでいった

ん、閉じさせていただきます。司会のふじたさん、よろしくお願いします。

んかして放浪の旅に出たなんて書いてありますけれども、確かにお父さんと喧嘩はしました。その喧嘩の原因は、忠重がかわいがっていた家臣が勝成の悪口をお父さんに言ったってということで、勝成がその人を殺してしまうんですよ。そういうことで、父親は勝成を勘当するわけです。勝成はすぐ、そんな勘当されたって自分は家康の家臣になるんだってことで家康のところに行くんですが、既にそのときにはお父さんから家康に対して、こういうのが来たら受け付けないでくれって言うことが言われておりますから、はねつけられます。そういうことがあるんで、ちょっとお話を。

— 司会 —

お客様は非常に歴史が大好きで。

— 来場者② —

とんでもない。私はずっと東京に住んでおりまして。生まれはこちらなんですけど、こちらに来て何にもやることがないんで、うちにある本を読んでいる。ただそれだけのことです。

— 司会 —

すごく深くいろんなことを知ってらっしゃるなと思って。それでは、質問を二ついただきましたので。まず、はじめの質問に関しまして、これは市長から。お願いいたします。

— 市長 —

大変ありがとうございました。よくご心配をいただける点で、これは本会議の中でもよく議論になる点でござまして。今のところ、事業費30億円程度かかるのではないかなということで議会でもお話をさせていただいたところがございます。そのために、毎年度、財政負担が集中することを避けるために、私どもでは大型事業をやるときには必ず特定目的の基金というのをつくらせていただいております。この総合文化センターを造らせていただいたときもそうですし、再開発をやらせていただいたときもそうですし、市の庁舎を造らせていただいたときとか、中央図書館を造らせていただいたとき

だとか、そういうときには必ず事前に、事業年度の計画を立てまして、その計画に沿って年度ごとに基金を積み立てていきます。

例えば事業金額が50億円というような場合はめどとして半分くらいまでは基金を積みながら、計画的にその事業を進めていこうというような、そういうことでいろんな事業を展開させていただいております。

この復元につきましても、健全な財政運用に努めるために、亀城公園等の整備基金というのをつくらせていただいております。財源としてはそこからの繰り入れと、寄付金ということも当然、考えておりまして、こちらのほうも既に、たくさんの方からいただいております。そして、国庫補助金の活用、こちらも当然図っていかなければいけないということで、国の補助金でどういうメニューがあるのかということ进行研究しているところでございます。

それから財源の回収ですね。費用対効果というような、経済効果のことだと思いますけれども、そういうお話もございました。公園整備に対する費用対効果といたしましては、特定の計算式により数値化したものはないわけなんですけれども、新たな社会資本総合整備計画の策定の際にその数値を記載することが必要となりましたことから、必要に応じまして費用対効果の算出は今後、行ってまいりますのでよろしくお願い致します。

そして経済効果ですけれども、本事業の主な目的は、まちの歴史を子どもたちや後世に継承しながら、まちへの愛着や誇りを醸成していくということで、先ほど来、申し上げているとおりでございまして、亀城公園の魅力向上、創出に伴いまして利用者の増加が予想できますので、中長期的にはなんらかの経済効果、今ではストック効果というような言い方をしておりますけれども、そういうようなものを発生させていきたいと思っております。よろしくお願い致します。

— 司会 —

ありがとうございました。図面のことなどについて、麓先生お願いいたします。

— 麓 —

正保城絵図っていうのは、幕府が全国の藩に命じて提出させたもので、これはほぼ全国同じような描き方をしております。城と城下町について。それ以後は、石垣の修理のためにまた、いろいろなそれぞれの城郭で作られているんですが、そういうことで城郭を分析研究していく上で、城絵図の中でも正保城絵図っていうのは非常に重要な資料であると言えます。

そして今度、その文化財の話ですが、天守だけではなくて建造物で指定されている文化財は門や櫓、いっぱいあります。名古屋城、惜しくも天守、本丸御殿が戦災焼失しましたが、じゃあ名古屋城には文化財が今一つもないかっていうと、決してそうではなくて、隅櫓であるとか門であるとか、そういうものが確か7棟、重要文化財で指定されています。

それともう一つ、これは最初の講演で冒頭に申しましたが、そういう建造物とは違って、文化財のジャンルの中で史跡というジャンルがあります。城跡っていったときには、史跡として貴重な文化財となる。それで日本中のいろんなお城が文化財になっているところもある。これも冒頭に申しましたが、じゃあ指定されてないと文化財じゃないかという、決してそうではなくて未指定の文化財という表現を私はしますが。これは将来、もっと価値が明らかになってくると当然、指定されていくことと思います。刈谷城にしても、今後、例えば市指定の史跡になるとか、県指定の史跡になるとかで、そういう将来の文化財指定のためにも、今、もし復元するとすると、いいかげんなことはできない。やっぱり史跡としての文化財の価値を高めるような復元をしないとイケない。それで、国指定と同レベルのような綿密な検討を今、行っているところです。

— 司会 —

そして、この地域のお城の復元というご意見もいただきまして、刈谷城が復元されてないと。そういう意見に関してはいかがでしょうか。では、市長、お願いいたします。

— 市長 —

先ほども若干触れましたけれども、現在は地方創生の時代でございまして、まちをどう魅力を高めていくかということが大変、大事な時期に差し掛かっているんじゃないかなと思います。地方創生とは、歴史・産業・文化を生かしたまちづくりということでございまして、まちの魅力や個性、先ほどもお話に出ていましたが、アイデンティティーを高めていくというようなことが魅力あふれるまちを独自に築いていくことではないかなと思っております。

幸い、刈谷市には産業という資源はありますが、歴史と文化という面で、起爆剤になるのがお城ではないかなと思っているところでございまして、お城があったという事実があるということが、刈谷市民が誇りに思っていただけ、市民が誇りに思わないで、他の誰が誇りに思っていたのかというところが私の思いでございまして。ありがとうございます。

— 司会 —

そして、かつなりなのか、かつしげなのかという、その読み方に関してはいかがでしょうか。

— 舟久保 —

幾つかございましたけれども、まず1点、安城についておっしゃっていたのは、多分、大乘寺とか安城の歴史博物館の周辺のことだと思うのですが、私が申し上げたのは江戸時代に入って藩というものが配置されて、四藩で各藩に一つの城ということで、先ほどの四つをあげさせていただきました。

それから水野かつとしとかつしげって同じなんですよ。同一人物です。両方呼び名がありますけど、かつしげ、かつとし、勝成の長男のことですよ。そのことをおっしゃっているんですね。(補足)「勝成」の読みは「かつなり」か「かつしげ」かについては、水野宗家20代目の水野勝之氏より「かつなり」が正しいと確認し、書いております。

それから、勝成出奔のくだりについて、今日は刈谷城のシンポジウムということなんで、富永半兵衛を切ってどうのこうの、というところ

までは全部はしよらせていただきました。

— 司会 —

それでは、またご質問のある方、どうぞお手をお挙げください。今、一番初めに手を挙げられたのが、私のほうから見えたのが、眼鏡をかけた方ですね。そちらの方にマイクをお渡しください。

— 来場者③ —

職場が市内にある病院です。幼い頃は私、福山市に住んでいたんですけども、福山城も戦災焼失した城郭ですけども水野勝成が初代藩主となられて、とても立派なお城を再現して、焼け残った櫓とかもあり、すごく市民の憩いの場で心のよりどころになっています。私、1年生のときに行ったことをまだ覚えているので、ぜひ刈谷城も素晴らしいお城を再現していただきたいと思うのと、あとは、やっぱり舟久保先生のお話も読ませていただいて、水野勝成、福山では本当に立派な方というイメージだったんですけども、刈谷に来てやんちゃな方だなということ、よく分かりました。職場に職場体験で中学生の子が来て、私、病院についての話をさせていただくんですけども、時間が余るので大体、水野勝成の話を振ると、100パーセント水野勝成のことをみんな知ってらっしゃって、さらに「徳川家康のいとこって知っている」ってちょっと小ネタを降ったら、刈谷の子どもたちは100パーセント知っていたので、すごいなと思いました。

ぜひですね、こんな素晴らしい人がいるので、市長には大河ドラマを誘致していただきたいと思うんですけども。井伊直虎で1年間引っ張れるんだったら、織田の時代から島原の乱までカバーしている勝成だったら、視聴率50パーくらい取れるんじゃないかと思うので、ぜひよろしくお願いします。

— 司会 —

ありがとうございます。そしてもうひとかた、では、今一番初めに目が合いました方。

— 来場者④ —

安城の話が出たんで。ヘリテージマネージャーってことで文化財の保存の関係の仕事をボランティアでやっている一人なんです。

僕はさっきの方が安城のことを、ほめて言われたのか、けなして言われたのかよく意味が分からなかったんですが、私としては非常に恥ずかしく思っています。そういうものが、皆さんが、関心があるのかないのか、そういう調査もされたことはありませんし。だから、僕自身は再現する刈谷市がうらやましいんですね。やっぱり、そういうことをきちっと見据えて歴史を考えて、やっぱりまちづくりをしていくのが基本だと思うので。

安城っていうのはそういうこと、ほとんどやらないんですね。何にもそういう議論になったことはありませんし。本当に安城っていうのは、話が長くなっちゃいますけど、安城宗家が60年間くらいあるんですよ。4代の親忠っていう人から、清康まで安城にあったんですよ。それから分家が3家あるんですね。桜井、福釜、藤井と14家のうち3家と本家が安城にあったんですね。そんなこと、安城の市長さんだって知らないだろうし、市の職員だって誰も知らないんです。そういうことを刈谷市は着目してされるってことはとてもうらやましいので、頑張っしてほしいと思います。

— 司会 —

ありがとうございました。お二方のご意見をいただきました。市長、一言お願いいたします。

— 市長 —

福山城は私も何度も行かせていただきました。そして福山城のすぐ東側に、賢忠寺さんという福山水野家の菩提寺がございまして。歴代の藩主さんの大きなお墓もお参りさせていただいておりますし、福山城の、特に伏見櫓ですか。あれは京都の伏見城から移築されたという、本当に昔からの櫓でして。本当に美しいお城が、ちょっとJRや新幹線で城内が分断されるみたいな格好になっちゃっていますので、大変気の毒だなと。もうちょっと昔の姿がしっかり残っ

ていると素晴らしい規模の曲輪のお城だったんだらうなということが想像できますし、私も大好きな町でございます。自治体同士としても福山市さんとも大変仲良くさせていただいておりますので、これからどうぞよろしくお願いをいたします。

— 司会 —

そして市長、引き続き刈谷市がうらやましいとおっしゃっていた方のご意見に関して一言だけ、お願いいたします。

— 市長 —

大変ありがとうございます。先ほど来、申し上げているとおり、私は常々、歴史を学ばなければ現在は語れないし、現在を学ばなければ未来は語れないと申し上げております。これは、先生方もおっしゃいましたが、やはり先人があって、先祖があって、今の私どもがあるということの中で、また未来へどう受け継いでいくのかという、そういう連続性のお話だろうというふうに思いまして、行政もそういうスタンスで、私は真意をそこに置いてきっちり仕事をしていく、進めていくべきだろうということが常々考えているところでありますので、どうぞよろしくお願いいたします。

— 司会 —

ご質問、ちょっと時間のほうが迫ってまいりましたけれども。はい、お手をお挙げいただきました。和服の方ですね、どうぞ和服の方にマイクをお持ちください。

— 来場者⑤ —

私、築城には見直ししていただきたいという考えなんですけれども。それについては今回のシンポジウムにせよ、この取っていただく時間があまりにも短いということで、今後、このような話し合いが何度もなされる上で、この会なのか、それともこれきりで終わりなのか、そういうことが、全く市民が分かっていない状態なんです。

私は安城市から嫁いで7年目になるんです

けれど、いろいろ不満はあります。小さな子どもも育てているので。その中で、刈谷城のことをもっと知りたい、どういうふうに造っていくのか、どういう考えでおられるのかっていうことを全く分からないんです。誰も知らないんですよ。周りに聞いても、よく分からないという。刈谷は今まで、それでお金があるから、全部造ってきたから、そのまま造るんじゃないのっていう考えなんです。全くうらやましい限りです。その辺どうなんでしょうか。

— 司会 —

もうひとかた質問をいただきまして。今、一番ずっと手を挙げていただきました。前の方で。どうぞ、マイク。申し訳ありません、お願いいたします。

— 来場者⑥ —

亀城公園の復興という形で今回のシンポジウムなんですけれども、類似されてるような、例えばかなり前に復元されてるような茨城県土浦市の土浦城ですとか、最近ですと宇都宮市の宇都宮城なんかが復元されているんですけど、その復元された経済効果みたいなものですとか、そういったものは刈谷市さんのほうでは試算か何かされているんでしょうか。

— 司会 —

二つご質問をいただきましたので、ではまず、最初のご意見のほうから市長、お願いいたします。

— 市長 —

ありがとうございます。復元に対する説明が少ないんじゃないかというような、そういうご趣旨のお話だったかと思います。第7次刈谷市総合計画の中でもうたっておりますし、継続してずっと事業としては構想を練ってきたお話でございます。

刈谷城址の整備で亀城公園の整備と合わせて隅櫓や城門、石垣などの復元を推進しますということで、記載をさせていただいております。計画的に進めておるものでございます。刈

谷のまちづくりの施策の一つに掲げられているところでございます、この施策に基づいて事業推進させていただいておるとご理解をいただきたいと思います。

また、発掘調査の現場説明会、築城 480 年記念事業など、いろんなイベントなど開催をさせていただいておりますし、刈谷市のホームページにおきましても、刈谷城の復元に関するこれまでの取り組み内容を掲載させていただいております、様々な方法で周知を図っておるところでございます。

しかしながら、詳しいことがよく分からないとおっしゃる方がお見えになるかもしれませんので、これからも事業の PR とともに、その必要性についていろいろ説明させていただきたいと思っております。よろしくお願いします。

— 司会 —

そして経済効果のご質問も先ほどいただきましたけれども、市長、その辺りもいかがでしょうか。先ほど、経済効果のお話は前半のほうでもいただきましたけれども。改めてまた、土浦城とかいろんなお城での経済効果などについての試算ということをどんなふうにということで、ご質問をいただきましたけれども。

— 市長 —

試算ということはやっておりませんが、例えば他の所の例でもいいでしょうか。例えば、復元整備というようなことをやられた過去のお城の関係でいきますと、姫路城で整備前ですと 119 万 5000 人だったものが、200 万人くらいということで、1.7 倍に入城者数が増えておりますし、熊本城でも 79 万人というようなものが 221 万 9000 人、2.8 倍になっている。あるいは、今治城でも 2 万 9000 人が 3 万 5000 人ということで、1.2 倍に増えておると、そういうような数字は持っておりますが、私どもではまだ試算ということまではやっておりませんので、ちょっとそれはご容赦をお願いしたい。今後の試算をさせていただくということでご了承お願いしたいと思います。

— 司会 —

いかがでございますか。はい、ありがとうございました。時間のほう、最長に延ばしてまいりましたがけれども、そろそろ、こちらのほうも締めなければいけない時間になってしまいました。

本当に皆さまのご意見、ありがとうございます。最後に結びといたしまして、竹中市長より皆さまにごあいさつをさせていただきます。市長、お願いいたします。

— 市長 —

それでは、大変長時間にわたりまして、皆さま方にはご清聴を賜りまして大変ありがとうございました。これからも、刈谷のまちづくり、昨年の 7 月 1 日に 15 万人ということを達成させていただきました。先ほども申し上げたとおり、若干成長率は伸びておりますけれども、まだまだ人口増加が図れるものということで思っております、そういうような中で、活力と活気をまちにちりばめながら、施策を進めてまいりたいと思っております。どうぞご支援、ご理解のほどをよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

— 司会 —

ありがとうございました。刈谷城シンポジウム、いかがでしたでしょうか。本日は大変貴重なご講演をいただきました、麓和善様、そして大変貴重なお話をお伺いすることができました、コーディネーターの矢野様、パネリストの高瀬様、舟久保様、竹中市長にもう一度、大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

以上をもちまして、刈谷城シンポジウムを閉会とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。なお、入場の際にお配りいたしました資料、アンケートが入っております。どうぞ皆さま、ご記入のご協力をお願いいたします。そしてお帰りの際、ホワイエにて係の者にご提出ください。また、総合文化センターの駐車場をご利用の方は、会場の外、ホワイエに駐車券の認証機がございますので、こちらを必

ずお通してください、本日はご来場、誠にありがとうございました。どうぞ皆さま、お気を付けてお帰りください。ありがとうございました。

写真記録

【第1部 基調講演】



【第2部 パネルディスカッション】



【客席のようす：小ホール】



【会場のようす：小ホールホワイエ】



アンケート集計結果

1. アンケート有効回答数
145 名（参加者数 281 名）

2. 来場者のお住まい

お住まい	市内	市外	県外	未記入	計
人 数	80	34	4	27	145

3. アンケート結果

Q1. 今回のシンポジウムを何によってお知りになりましたか？（複数回答可）

市民だより	市ホームページ	チラシ	ポスター	新聞	その他
46	20	34	21	43	27

Q2. 今回のシンポジウムの内容はいかがでしたか？

大変良かった	良かった	ふつう	あまり良くなかった	良くなかった	未回答
52	55	19	4	6	9

Q3. 麓和善氏の基調講演はいかがでしたか？

大変良かった	良かった	ふつう	あまり良くなかった	良くなかった	未回答
57	55	24	3	3	3

Q4. パネルディスカッションはいかがでしたか？

大変良かった	良かった	ふつう	あまり良くなかった	良くなかった	未回答
54	40	23	12	4	12

刈谷城シンポジウム～城郭復元と歴史まちづくり～
記録集

平成29年3月発行

発行 刈谷市

編集 都市政策部公園緑地課

〒448-8501 刈谷市東陽町1丁目1番地

TEL : 0566-23-1111 (代表)

URL : <http://www.city.kariya.lg.jp/>